

---

# 僕達の地球（ほし）

マジュモトコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕達の地球<sup>ほし</sup>

### 【Nコード】

N7810E

### 【作者名】

マジユモトコ

### 【あらすじ】

仲良し3人組の園児、高史君と晃君と悠君の地球を救う友情物語  
<1話完結他全5話>

## < 1 > 3秒の法則

僕達の地球<sup>ほし</sup>

### < 1 > 3秒の法則

「ボクさ！昨日秘密組織のボスに会ったんだ！！」

そう言つと、きりん組の高史君は得意げに胸を張った。

「うつそだ〜！！だつて秘密組織のボスに会えるのは世界で1人だけなんだぞ！」

顔を真つ赤にして怒り出したのは同じきりん組の晃君。

「そうだよ！高史君の会ったボスは偽物だよ！だつて…ボクも秘密組織のボスに会ったもん！ボクに地球を頼むつて言つてたもん！」

また同じきりん組の悠君の言葉に、高史君と晃君は思いつきり驚いた。

「ボつ…ボクだつて会った事あるんだぞ！ボクの会ったボスが本物だぞ！」

思わず晃君は大きな声で叫んでしまった。お母さんとの約束を破つてしまった晃君は、顔を青くさせた。

「何言つてんだよ！晃みたいになちっちゃい子がボスに会えるワケないじゃん！」

高史君は晃君の小さい肩を両手で押した。晃君はよろよろとふらつき、そのまま尻もちをついた。

「…うわあ〜ん！！！」

晃君は地面に座ったまま勢いよく泣き出した。

騒ぎに気付いた小林先生が慌てて園児に駆け寄った。

「何？何？どうしたの？あら！どうしたの？晃君！」

「晃がうそばっかり言うからいけないんだ！」

高史君の言葉に晃君はヒックヒックと泣きじやくりながら反論した。

「うっ…うそじゃっ…ないもん！…ヒっ…ボクっ…本当にボスに会ったもん！…お母さんが誰にも言っちゃいけないって言ったから…ヒっ…言わなかったんだもん！」

「一体何の話してるの？」

小林先生は困った顔で3人の園児を見つめた。

「よし！そしたら晃が会ったボスはどんな服着てたか言ってみるよ！」

高史君はぶすつとした表情で、小林先生にしがみついて泣いている晃君に言った。晃君は意を決したように小林先生から離れ、ゆっくり立ち上がった。そして涙と鼻水をスモックの袖でゴシゴシと拭いた。

晃君のつぶらな瞳がキラツと光り、高史君と悠君は一瞬息を呑んだ。

小林先生はポカンと口を開けたまま、その3人の光景を見つめた。

「白色の帽子を被ってて、白色の洋服を着てた」

晃君の言葉に、高史君と悠君は歓声を上げた。

「ボクもその人見たよ！靴も真っ白だったよな！」

悠君が興奮気味に言った。

「黄色い傘持ってたよな！ボスは黄色が好きだって言ってたんだよ！」

高史君も頬つぺたを真っ赤にさせて言った。

「それでね！ボク、仲間のしるしに黄色いハンカチをボスからもらったんだ！」

晃君は嬉しそうにそう言うと、半ズボンのポケットから黄色いハンカチを引っ張り出した。そしてその黄色いハンカチを高々と持ち上げた。

高史君と悠君は目を丸くさせた。そして自分達も慌ててポケット

から黄色いハンカチを引っ張り出した。

3人はそれぞれの黄色いハンカチをしげしげと眺め、プルプルと震え出した。

「なんだ！！そしたらボク達3人仲間じゃん！」

悠君が弾けんばかりの笑顔で叫んだ。

「そうだよ！晃、ごめんな！」

高史君は恥ずかしそうに頭を掻きながら晃君に言った。

「うっん！いいよ！だってボク達仲間だもん！」

「はーい！もうお外遊びはおしまいよ！みんな、お部屋に入ってね！」

「はぁーい！！！」

先生の声に園児達は元気に返事をして、廊下の手洗い場で石鹸をブクブク泡立たせ、キレイに手を洗い、うがいをしてお部屋に戻った。

高史君と晃君と悠君は意気揚々とお部屋の隅に座り込んだ。高史君は先生からもらった色画用紙を広げ、画用紙の上の方に

<ボクたちのきまり>

と言う文字をクレヨンででかでかと書いた。

「いいか、晃！悠！この画用紙にボスの言葉を書くぞ！」

「うん！」晃君と悠君は元気に頷いた。

「1．弱い者いじめをしない！」

高史君の言葉に晃君は顔をしかめた。

「高史君、ボスの言う事もう破ったの？」

晃君の言葉に高史君は顔を青くさせた。

「だからすぐ謝ったじゃん！」

「そつか！なら大丈夫だね！」

晃君はほっとした表情をした。

「2．ご飯は絶対残さない！」

この言葉に今度は悠君が顔をしかめた。

「…ボク…昨日トマト残した…」

悠君の言葉に高史君と晃君は目を丸くした。

「ダメじゃん！悠！ボクはトマト食べれるぞ！」

「でも高史君ニンジン食べれないじゃんか！」

悠君の言葉に高史君は言葉を詰まらせた。

「きつ…昨日のカレーのニンジンはちゃんと食べたぞ！」

「カレーのニンジンならボクも食べれるよ！グリーンピースも食べれる！」

晃君は得意げに叫んだ。

3人はしばらくの間、ここ数日間の食べた物と食べなかった物を言い合った。

「——まあ、とにかく！今日のお弁当からスタートだぞ！」

高史君の言葉に晃君と悠君は頷いた。

「3…ママとの約束は守る！」

「それなら大丈夫！ボク昨日ママから褒められたもん！」

悠君は嬉しそうに言った。

「あつボクも！ママから褒められたぞ！」

高史君も負けまいと言い返した。

晃君だけがうつむいたまま、黙っていた。

「？どうした？晃？」

「晃君？」

高史君と悠君の言葉に、晃君はみるみる泣きそうな顔になった。

「…ボク、さつき…お母さんとの約束破っちゃった…」

「ええ！？本当か？」

晃君の言葉に高史君は叫んだ。

「だってえ！高史君がボクの事嘘つきだって言うから…だからお母さんがボスに会った事誰にも言っちゃいけないって言ったけど…喋っちゃったんだよ…」

晃君は瞳を潤ませながら言った。

高史君も悠君もとても困った顔をしたまま晃君を見つめた。

「…何で晃のママは言っちゃいけないって言ったんだ？」

高史君の言葉に晃君はきよとした。

「分かんない…」

3人はお昼の時間まで黙々と画用紙いっぱい、思い出す限りの  
“ボスの言葉”を書いた。

「よし！そしたら今からこのきまりをボク達がみんなに教えるんだ  
！」

「おー！！」

3人はきりん組全員に＜ボクたちのきまり＞を教え回った。きりん組の子供達は真剣に高史君達のお話を聞いた。

「——それ守ったら地球は救われるの？」

きりん組のアイドル、絵里奈ちゃんは大きな瞳をパチパチさせながら言った。

「そうさ！そしたらボスからご褒美がもらえるんだぞ！」

晃君が頼つぺたを紅潮させながら言った。

「ご褒美って何？」

絵里奈ちゃんの問いに3人は言葉を詰まらせた。

「……何って…それは絵里奈ちゃんが1番ほしい物さ！」

高史君はあせあせしながら答えた。

「絵里奈が1番ほしい物って…そのボスは知ってんの？」

「…ボスが絵里奈ちゃんのママに聞きに行くんだよ…たぶん…」

3人は絵里奈ちゃんにボスの話をした事を少し後悔した。

そんなこんなで、きりん組全員の園児に教え終えた3人はほっと安心した。安心したらとてもお腹が空いてきた。

「はぁ～い！お弁当の時間ですよ！みんな、お手てをキレイに洗ってお弁当の準備をして下さい！」

「はぁ～い！！」

園児達は競い合うように手を洗い、スモックの上から前掛けをして、お母さんに作ってもらったお弁当を持って席に着いた。

「みんな！今日はちゃーんとお利口さんに出来ましたね！それでは、いつも働いているお父さんに有難う！」

「お父さん、ありがとう！」

「いつも美味しいご飯を作ってくれるお母さんに有難う！」

「お母さん、ありがとう！」

「合掌！……いたあ～だきますす！！！」

「いたあ～だきますす！！！」

園児達は一斉にお弁当箱を開いた。

タコさんウィンナーやピカチュウの顔をしたハム、サッカーボールの形をしたおにぎりなど……1週間に1回の“お弁当の日”のお弁当は、園児達の母親の血と汗と涙の結晶でもあった。

「すっげえ！晃のご飯、悟空の顔だ！！！」

今日の“主役”は晃君だった。晃君は得意げに胸を張った。

「ボクのは電車のハムだぞ！」

「あたしはキティちゃんの！」

園児達はお弁当箱を興奮気味に見せ合った。

「見てみる！カニさんウィンナー……」

悠君も負けじとカニの形をしたウィンナーをお箸でつまんで高々と持ち上げた——その時、カニさんウィンナーがお箸からこぼれ、床に落ちてしまった。

園児達は一瞬、無残にも床に落ちてしまったカニさんウィンナーを見入った。

「……たっ……大変だ！！悠君のカニさんウィンナー落ちちゃった！」

園児達は一斉に騒ぎ出した。悠君は瞳に涙をため、泣き出そうとした時、

「悠！早く拾え！」

高史君が叫んだ。園児達は一斉に高史君に注目した。悠君もびっくりにした表情のまま高史君を見た。

「3秒の法則だ！ーばあちゃんが言ってたもん！3秒のうちに拾って洗えば食べれるって！だから悠！早く拾って洗うんだ！」

高史君の言葉に悠君は慌ててカニさんウィンナーを拾った。そして手洗い場で丁寧に洗った。

「ほっ…本当に食べれるの？ママはいつも落ちたのは汚いから食べちゃダメだって言うよ」

悠君は不安げに高史君を見つめた。

「大丈夫だって！ボクいつもそうやって食べてるもん！それにボスとの約束忘れたのか！？」

悠君はハツとした。

「そうか！食べ物は捨てちゃダメなんだ！」

悠君は慌ててそのカニさんウィンナーを口に放り込んだ。  
モグモグ…ごっくん。

「どうだ？おいしいだろ？」

高史君は悠君に言った。園児達はそんな2人の様子を黙って見ていた。

「うん！おいしい！！」

高史君も晃君も、そして園児達もほつと胸を撫で下ろした。

その日の出来事がきっかけで、園児達の間で<3秒の法則>が流行ってしまった。園児達は床にボロボロ落とした食べ物を水道水でサツと洗って食べるようになった。そして園児達はそれを家でもするようになり……ちよつとした問題なってしまった。

基本的に、この<3秒の法則>を許せない母親達は先生に抗議し、先生達はとても困ってしまった。先生達はどうする事も出来なくて、園長先生に助けを求めた。

園長先生は静かに頷きながら若い先生達の話聞いた。

「分かりました。私から子供達にお話ししましょう」

その日のお昼前に、園長先生は園児達全員をお外に集めた。

「——はあゝい！みんな、今日はお昼ご飯を食べる前に先生からお話があります。静かに聞いて下さいね！」

「はあゝい！」

園児達は元気に返事した。

「最近みんなの間でく3秒の法則>と言うきまりが出来ているみたいだけど、それってどういうきまりなのかな？」

「はい！」

園長先生の言葉に高史君が元気に手を挙げた。

「食べ物を粗末にしちゃいけないって、ボスが教えてくれたんだよ！」

「？ボスって？」

高史君は一生懸命、園長先生に白いスーツ姿の黄色い傘を持ったボスの話をした。あんまり力んで喋るから、高史君のこめかみから汗が流れ落ちた。

「——そうなの…だからみんな最近ご飯を残さず食べているのね」  
園長先生は優しく微笑みながら言った。園児達はみんな誇らしげな表情をした。

「みんなが食べ物を残さず食べてくれるのはとっても偉いわ！でもね、床に落としてすぐに洗ってもばい菌が落ちてなかったらどうなると思う？」

ザワザワと園児達が騒いだ。

「お腹が痛くなっちゃうよ。そしたら病院に行かないといけない。みんなのパパやママがとっても悲しむわ」

ますます園児達が騒ぎ出した。

「じゃあ、どうすればいいの？」

晃君の質問に園長先生は優しく穏やかに答えた。

「1番良いのはご飯をこぼさずに食べる事。ゆっくりよく噛んで食べるのよ。そしたら洗わなくていいし、お腹も痛くならないわ。みんなのママも喜ぶわよ」

園児達は納得した様子で黙って園長先生の話を聞いていた。

「さあ！みんな！お腹空いたでしょ？今日からお行儀よくこぼさずに食べましょうね！」

「はぁい！！！」

園児達は瞳を輝かせながら、元気に返事した。そしていつものように手洗い場でキレイに手を洗い、スモックの上から前掛けをして席に着いた。

今日のお昼ご飯は、みんなの大好物のカレーライス！

「それでは、いつも働いているお父さんに有難う！」

「お父さんありがとう！」

「いつも美味しいご飯を作ってくれるお母さんに有難う！」

「お母さんありがとう！」

「合掌！…いたあだきます！」

「いたあだきます！」

園児達は一斉にカレーライスを頬張った。でも園長先生の言う通りに、ゆっくりよく噛んで食べた。

この時の園児達はまだ知らない。

自分達がこうやって地球を守る大人に成長している事を。

そして、先生達が『白いスーツ姿の不審者がいる』と警察に通報した事を――

< 1 > 3  
秒の法則

E  
N  
D

## <2>立派な大人になるために

僕達の地球<sup>ほし</sup>

<2> 立派な大人になるために

「——ねえ！今日の夜さ、淳哉達と遊ぶんだけど沙織達も来ない？」

え！？今日の夜！？明日から全国模試じゃない！！

「いいね！行く行く！…で、どこ行くの？」

ヤダヤダ！お願いだから私は誘わないでよ！

「。。。で待ち合わせしててマック行つて…」

「私さ…バイトあるから終わったら行くわ」

「OK…ねえ！友里！」

そんなあ…

「友里？どした？」

真理ちゃんはきょとした顔で聞いてきた。私はガツクリ感を悟られないように作り笑いをした。

「ううん！何でもないよ」

「じゃあさ！学校終わったらそのまま友里ん家行ってもいい？また服貸してよ！」

またあ！？この間借りてったワンピースも返してないくせに！！

「…うん…」

まただ…。また私はこうやって真理ちゃんに振り回されるんだ。

「なあに？友里、元気くない？」

沙織ちゃんの言葉に私はギョツとした。

「…もしかしてさ…行きたくないの？」

さつきまでクルクル笑っていた真理ちゃんの顔が一気に冷たくなつた。

「いつ…いや…そうじゃないんだけど…」

「何よ。ハッキリ言いなよ」

真理ちゃんの口調がだんだんきつくなってきた。

「真理、ちよつと怖いって！ねえ、友里！」

沙織ちゃんはカラカラ笑いながら…カバンからミラーを取り出して、くつきりウェーブのかかった茶色い髪をいじりながら言った。

「あ…明日から…テストだからさ…私全然勉強してないの…」

私は勇気を振り絞って言った。そして、恐る恐る真理ちゃんの顔を見た。

「ぶ——！！」

真理ちゃんはいきなり吹き出した。

「ヤダ友里！何真面目腐ってんの！超ウケる！」

ゲラゲラとお腹を叩きながら、そして私の肩を叩きながら笑う真理ちゃんの笑い方が私は好きではなかった。でも、もちろんそんな事本人に言えるワケも無く…私は苦笑いしていた。

「今さら勉強したって手遅れじゃん！諦めなつて！ね！沙織！」

沙織ちゃんもゲラゲラ笑い出した。

私は小さい頃から引つ込み思案で、目立たない女の子だった。私はそんな自分自身が嫌いだった。だから何か大きく生まれ変わりたい…今通っている高校に合格出来たら何か良い風に変われるんじゃないかって…思つて、必死に勉強して合格を勝ち取った。

最初はすべてが新鮮で、キラキラ輝いて見えた。彼氏とかも本気でほしいと考えていた。

そんな時、真理ちゃんに声を掛けられた。

パッチリした可愛らしい瞳をパチパチさせながら、彼女は優しい笑顔で私の席の前の席に座っていた。

「へえ…名前、友里って言うんだ！私、真理って言うの！よろしく

ね！」

こうして、真理ちゃんは私の高校生活最初の友達になった。

それから…何をするにも一緒だった。

朝、『おはよう』から始まって家に帰るまで、私は真理ちゃん達とたくさんの事を喋り続けた（ほとんど聞き側だったけど）。前の日のテレビ番組の事とか、雑誌の事とか、私以外のみんなの彼氏の事とか…杉原さんの悪口とか……

お昼もみんなと一緒に食べて、一緒にトイレに行って、休みの日も一緒に遊んで……

同じデザインのカバンを買って、お揃いの携帯ストラップを付けて、学校帰りに遊ぶ時は私の洋服を貸してあげて……

最初っから無理だったんだ。

あんな派手な真理ちゃん達と一緒にいても、何にも楽しくなかったんだ。早く離れるべきだったんだ。

でも…もう手遅れ…。

「—— 諸岡… お前本当に。。。大、行く気あるのか？」

担任が半分呆れ顔で言った。それは仕方無い事だった。

私の成績はかなりひどく、何度も両親からお説教されていた。

「…すいません…」

私は返す言葉も無く、呟くように言った。

担任は小さくため息を吐いて、机の上のファイルを閉じた。

「諸岡、お前本当にこのままでいいのか？」

「え？…」

思いもしなかった担任の言葉に、私は驚いた。

今日の担任の服装は妙だった。白のスーツに黄色の靴下…

「高校生活もあと一年半で終わりだぞ。このまま他人に流されていて…大事な時期を棒に振っていいのか？」

私は驚きのあまり、言葉を詰まらせた。この妙な恰好の担任が、何を言いたいのか分からなかった。

「まあ、それはお前自身の問題だからな。俺はどうしてやる事も出来ないけどな…」そう言うと言任はまたため息を吐いた。「とにかく、この成績じゃどこの大学にも行けないぞ」

半分呆然としながら、私は教室を後にした。そしてそのまま図書室へ向かった。

「杉原さん！次いいよ」

図書室で勉強していた様子の杉原さんは私の言葉を聞いて、教科書とノートをカバンに入れた。

「ありがとう…」

そう言うって妙な恰好の担任の待つ教室へ行くこうとする杉原さんを、私は目で追っていた。

「…杉原さんは…」

「え？」

杉原さんは私の言葉に振り向いた。黒縁メガネから真っ直ぐに私を見つめ返してきた。

「…あつと…杉原さんは大学行くんだよね？やっぱり…」

杉原さんは少しだけ首を傾げた。

「すっ杉原さんは頭良いもんね！絶対大学行くに決まってるか！」

あはははと、私はぎこちなく笑いながら言った。

「うん、大学行くためにこの高校に入ったんだもん。諸岡さんはそうじゃないの？」

杉原さんのメガネ越しの真っ直ぐな視線は、なぜかチクチク痛かった。

< 諸岡さんはそうじゃないの？ >

私は……どうだったかな？

何で私は今ここにいるんだろう？

「杉原く頼むって！宿題写させてよ！！」

1 限目の数学の前に、真理ちゃん達がいつものように杉原さんをはからかっていた。私はその光景を見て見ぬふりしていた。

杉原さんは黙ったまま図書室の本を読んでいた。

「杉原って！！」

真理ちゃんには杉原さんが読んでいた本を取り上げて、窓から廊下に投げた。

「無視すんなよ！杉原！」

ゲラゲラ笑い出した真理ちゃん達を横目に、杉原さんは本を拾いに廊下に出た。真理ちゃん達は杉原さんのカバンとか机の中の教科書とかを全部窓から廊下に投げた。

教室にいた生徒全員がクスクス笑い出した。

杉原さんは口をぎゅっと閉じたまま、廊下に散らばった教科書とかを拾っていた。

杉原さんは入学当初から真理ちゃん達のいじめの標的にされていた。いじめの内容は結構ひどくて……いつも1人である杉原さんを見て、私は何で杉原さんが休まずに学校に来ているのか不思議で仕方無かった。

私だったら、絶対耐えられない。

「友里！彼氏ほしくない？」

学校帰りに誘われて入ったマツクのコーラを飲みながら真理ちゃんが言った。あまりに突然だったので、私は驚いてコーラを吹き出してしまった。

「やっだ！汚いなあ！」

「ごめん、ごめん…だっていきなりなんだもん」

私はテーブルの上にこぼれたコーラを紙ナプキンで拭きながら言った。

「淳哉の友達、紹介してあげようか？」

「いいよ！今はいい！」

私はサーと血の気が引いた。去年の夏の事を思い出した。

1年の夏休みに真理ちゃん達と海に遊びに行つて、そこに真理ちゃんの彼氏、淳哉君も何人かの友達を連れて来た。

その友達も最悪だった。

いきなりホテルに誘われて、私は怖くて怖くて泣き出してしまったのだ。

「どうして？…ああ、大丈夫だって！今度の子は友里の事襲つたりしないから！ね？また夏休みに一緒に海行こうよ！」

「…本当に彼氏はいららないの？…私の事は気にしないでいいよ！」

私は必死に言った。その必死さが真理ちゃんの坎に障った。

「…なんか、友里最近冷たくない？」

そう言いながら、真理ちゃんは冷たい視線で私を見た。

「そっそんな事ないよ！やだなあ！！」

私は慌てた。背中とか腋から汗が噴き出した。

「ならいいけどさ…」

そう言いながら、真理ちゃんは携帯をいじり始めた。その間、私はいやな汗をかきながら味のしないハンバーガーを口へと運んだ。

もう限界にきていた。

真理ちゃん達という息が詰まりそうになっていた。胃もキリキリと痛んだ。学校になんか行きたくない。行きたくない。そんな事ばかり考えるようになっていた。

そして私はついに倒れた。

体育の授業中に脱水症状を起こしてぶっ倒れた。

「大丈夫！？友里いゝ！！！」

真理ちゃんの甘ったるい声が保健室に響いた。

「ほら！あなた達！！早く教室に戻りなさい！！もうすぐ授業始まるわよ！」

「先生！お願い！ここにいさせて！友里のそばにいたいのに！」

私は内心ぞつとした。真理ちゃんがそばにいたら余計具合悪くなる！！

「何言ってるの！早く行きなさい！！！」

保健室の先生の言葉に真理ちゃんは口を尖らせた。

「先生のケチ！じゃあね、友里！また来るね！」

真理ちゃん達が保健室から出ていくと、室内は嵐が去ったようにシンと静まり返った。

「落ち着いたらお家に帰る？」

「…はい…」

「そう、そしたらお家に連絡しとくわね。お母さんいらっしやるわよね？」

「はい…たぶん…」

「分かったわ。」

先生は笑いながら保健室から出て行った。

私はしばらくの間、ベッドに仰向けに寝たまま天井を見ていた。

「失礼します…」

カラカラとドアの開く音と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

私はゆっくり起き上がり、カーテンの隙間から覗いた。入口には杉原さんが立っていた。

「杉原さん？どうしたの？」

「諸岡さん、もう起きて大丈夫？」

杉原さんはそう言うのと心配そうに私に寄って来た。杉原さんは左手をハンカチで押えていた。ピンク色のハンカチには血が滲んでいた。

「怪我したの！？結構血出てるよ！」

「うん、大丈夫。ちよつとかすつただけ。それより諸岡さんはもう平気？」

「うん…もうちよつとしたら家に帰るの」

「そう…」

杉原さんはベッドの近くにあった丸椅子にちよこんと腰を下ろした。

「先生、すぐ戻って来るよね？」

「うん、それまでここで待ってたらいいよ」

杉原さんは微かに微笑みながら左手を抱えていた。

ピンク色のハンカチに滲んだ血がとても痛々しかった。

「…それ…真理ちゃんにやられたの？」

私の言葉に、杉原さんはゆっくり私の方を見た。あのメガネ越しの真っ直ぐな眼差しで。そしてゆっくり私から視線を逸らした。

「…杉原さんって…どうしてそんなに強いのか？」

そう言っただけで私はハッとした。こんなに、何の躊躇いもなく思っている事を口にした事に私自身かなり驚いた。そして杉原さんも驚いた表情をしていた。

「ごつごめん…何か意味分かんないよね？」

私は思わず笑い出した。

そして、杉原さんもくすくすと笑い出した。

「私も疑問に思っていたの。何で諸岡さんはあんなに我慢してるんだろうつて…」

「え？」

「いつも我慢してるじゃない？あの人達というの」

私は胸がドキドキしていた。

「私だったらあんな人達というより1人の方がいいもん」

杉原さんはそう言うのと穏やかに微笑んだ。

「…私は…杉原さんみたいな目に遭ったら絶対学校に行けなくなるの…だから…」

だから、我慢するしかない。そう自分自身に言い聞かせていた。私はそう言いながら、考えながら思わず泣き出しそうになった。だから慌てて顔を上に上げた。

「諸岡さんも結構強いよ」

「え？私が！？」

私は驚いて杉原さんを見た。

「うん、ある意味強い」

「…ある意味ね…」私は苦笑した。「…どうやってたら杉原さんみたいに強くなれるかなあ？」

「私、そんなに強くないよ？」

「ええ！！すつごく強いよ！たくましい！！」

「たくましい！？…なんかその言葉は嬉しくないな…」

「あついや…私、結構懂れてたんだよ！」

「私の事を？」

「うん！！」

杉原さんは複雑な表情をした。

「本当はね、私学校に行きたくないって親に泣き付いた事あったの。ほら、あの人達のする事って結構悪質なんだよね。だから我慢できなくてさ」

「…それで学校休んだの？」

「うん、1日だけ」

私は目が点になった。

「1日だけ!？」

「うん、それ以上はダメだつて母親から言われたの」

杉原さんのお母さんつて結構厳しい?

「家の親が言うにはね、私達の人生つて70年も80年も続くじゃない!その内のたった3年足らずの出来事に翻弄されて挫折するのか!て。何のためにあんなに必死に勉強してこの高校に入ったんだ!良い大学出てお母さんみたいな弁護士になりたいんだろ!...つて家の母親弁護士なの。ちなみに今シングルなのよ」

私はあまりにスケールのデカイ話に圧倒されていた。

「確かにそうだなって考えたの。私はあんな馬鹿な人達の犠牲になりたくないって思ったのよ。だから我慢して学校行ってちゃんと勉強しようって決めたの」

杉原さんはにこつと笑った。その笑顔は本当に可愛らしかった。

しばらくして保健室の先生が戻ってきた。先生が杉原さんの手当をしている間、私は制服に着替えて帰る準備をした。

「先生、帰ります」

「ああ、気を付けてね!」

「はい...じゃあね、杉原さん!」

「うん!バイバイ!」

校門を潜り、家まで真っ直ぐ無心で歩いた。ズンズンズンズン...足裏から伝わってくる振動を全身で感じながら、私はリズムミカルに歩き続けた。

家に帰ると母親が心配そうな表情で出迎えた。

「友里!大丈夫?今から病院行く?」

「ううん、いい!それよりお母さん!」

私は力強く母親を見た。

「私、闘うわ！」

「…は？」

キョトンとした顔の母親を横目に、私は勢いよく階段を駆け上った。そして勢いよくベッドに倒れ込んだ。

明日だ。明日から闘いが始まる。

「友里！…大丈夫？」

朝、学校の下駄箱の所で真理ちゃんは私の事を待っていた。真理ちゃんの甘ったるい声が頭にジンジン響いた。

「うん、もう平気」

「良かった！すっごい心配してたんだよ！」

真理ちゃんはカラカラ笑った。

この笑顔がそろそろ豹変する。

真理ちゃんと一緒に教室に入って、黒板を見て私はギョツとした。黒板には隅々まで杉原さんの悪口（ウザいとか死ねとか…）が色取り取りのチョークで書いてあって、中央には杉原さんのびりびりに裂かれた体操着がガムテープで貼られていた。

「そろそろ来るよ！」

窓からグラウンドを眺めながら沙織ちゃん達が得意げにいった。

「超ウケる！ねえ、友里！」

私は大きく息を吸い込んだ。

その時、教室に杉原さんが入ってきた。

「やっと来た！杉原！」

真理ちゃんはニヤニヤ笑いながら杉原さんを見つめていた。教室

にいた生徒全員が杉原さんに注目した。

杉原さんはゆっくり黒板を見た。そしてスタスタと黒板のトコまで行って体操着を黒板から剥がした。

クスクスと真理ちゃん達が笑っていた。

私はもう一度、大きく深呼吸した。そして私もスタスタと黒板のトコに行って杉原さんと肩を並べた。

「友里？」

真理ちゃんの凍るような冷たい視線を背中に感じながら……私は黒板消しを手に取り、杉原さんと一緒に黒板に書かれた文字を消し始めた。

「……諸岡さん……いいよ……」

杉原さんは少し慌てた様子で、小声で言った。

「いいの！消したいの！」

私はそう言って小さく頷いた。そして杉原さんを見て微笑んだ。

杉原さんも笑ってくれた。

「ありがとう」

教室中が静まり返っていた。生徒達が一斉に自分達に注目していた。自分の心臓がドクドクと鳴っているのが分かった。

「——友里……」

真理ちゃんの刺々しい声が教室に響いた。

私は意を決し、振り向いた。

真理ちゃん達の鋭い視線が全身に突き刺さった。

「何の冗談？」

教室中にせせら笑う声が広がっていた。

笑いたいなら笑え。

どんなひどい現実が立ちはだかろうとも、私は動じない。

私はもう負けない。

私は闘うのだ。

私の人生を守るために

立派な大人になるために

< 2 > 立派な大人になるために

E  
N  
D

### <3> 余命60年

僕達の地球<sup>ほし</sup>

### <3> 余命60年

「――瀬戸さん！瀬戸洋介さん！！」

「はっはい！はい！！」

看護師の声に俺は慌てて返事をした。

「お待たせしました。診察室へお入り下さい」

「はっ…はい…」

おずおずと診察室へ入った。目の前には完全にメタボ体型の医者  
が椅子に座っていた。

「ええ…と…瀬戸さんですね、どうぞ座して下さい」

俺は言われるがまま、医者の前に置かれた丸椅子に腰を下ろした。

今日は会社規程の健康診断を受けるため、有休を取ってこの医療  
センターに来ていた。俺は今年で35歳になったので、去年の健康  
診断より少しばかり検査項目が増えていた。

「検査結果は会社の方に3、4週間後に郵送しますので…お疲れ様  
でした」

素っ気なく言う看護師にとりあえず軽く頭を下げ、俺はセンタ  
ーを後にした。

センターを出ると途端に蝉の猛烈な鳴き声と、うだるような熱気  
に襲われた。俺は着ていたポロシャツのボタンを全部外しながら駐  
車場へと急いだ。

今、家に帰ってもまだ誰も帰っていないだろうなあ…

そんな事を考えながら、バリウムのせいでゴロゴロ鳴りっぱなしの腹を手で押さえながら車に乗り込んだ。

俺の生活は本当に平凡だ。

朝、6時半に起床して顔を洗い…（妻の佐和子が顔を洗ってから朝ご飯を食べないとすぐ怒る）…佐和子が用意した朝ご飯を食べ、朝刊に目を通し…したら娘の奈菜も起きてきて、佐和子にお気に入りのゴムで髪を結ってもらう…

「パパ！可愛い？」

満面の笑みで奈菜が言う。

「ああ、とっても可愛いよ」

俺の言葉に奈菜は満足げな表情をする。

「良かったわね、奈菜！」

「うん！」

奈菜は元気に返事をする。そんな奈菜を佐和子は優しく見つめ、そのままの視線を俺に向ける。そして言う――

「あなた、今日も遅くなりそうなの。悪いけど奈菜のお迎えよろしくね」

毎朝、毎朝…佐和子は同じ表情で同じ言葉を吐く。

「ああ…分かった」

「お夕飯は…」

「準備して行くんだろ？イチイチ言わなくても分かってるよ」

俺は思わず不機嫌な声で言ってしまった。

「…そうね…ごめんなさい」

佐和子は苦笑いしながら呟いた。

佐和子と奈菜より少し早めに新築したばかりの家を出て、駅へと

小走りで急ぐ。いつもの時間の電車に乗って、いつものようにドアの近くに立つ。そして毎日聞くバ力でかい声が聞こえてくる…

「瀬戸さ〜ん！おっはようございます！今日も良い天気ですねえ〜！」

会社の後輩、舛本慎之介。舛本はもうすでに汗だくで、タオルで汗を拭いながら俺に近寄って来た。

「本当にお前は暑苦しいな…」

本気で俺はイライラしながら言った。

「そんなひどい事言わないで下さいよ！俺が悪いんじゃないっすよ！殺人的はこの暑さがいけないんですよ！…まあ、この殺人的な暑さの原因は俺達人間にあるんですけどね…」

珍しく、舛本はしんみりと語り出した。

「このままじゃ、この地球には住めなくなるかもしれないってテレビで言っていましたよ！俺や瀬戸さんはいいとして、ほら！奈菜ちゃん達が大人になった時がヤバいっすよね！」

正直、奈菜が大人になった時の事なんか考えていなかった。そんな事より、1年後、2年後の俺達夫婦の存在の方がリアルに危険だった。

「何か…瀬戸さん、疲れたまってるみたいですね？どうです？今日パツと飲みに行きませんか？」

「え？…ああ、今日もダメなんだ。悪いな…」

「そうか…奈菜ちゃんですか…仕方無いっすね！奥さん忙しいんですよね！また今度行きましょう！」

舛本は額の汗をタオルで拭いながら大声で笑った。

俺と佐和子は見合い結婚だった。

そろそろ結婚を考えてもいい歳になろうとしていた（正確には互いの親が当人達より焦っていた）。当時、俺は別に付き合っている女がいたワケでもなく、と言って早く結婚したかったワケでもなかったが…親達がセッティングした見合いを断る理由も無かった。

佐和子の第一印象は…悪くはなかった。いや、結構良かったうちだ。

細身の色白美人で、料理の腕はプロ並み。茶道に華道にと…絵に描いたような大和撫子だった。

当然、俺の親は佐和子を気に入り、佐和子との結婚を強く望んだ。俺は…納得いかなかった。何で佐和子みたいな女が結婚もせず、1人でいるのか強い疑問を持った。そして俺は2人だけになった時、その疑問を佐和子にぶつけてみた。

『——今までお付き合いしていた方と縁が無かったただけですよ』  
そう言いながら佐和子は穏やかに微笑んだ。

『…今まで俺は5人の女と付き合ってきたんだ。正直、結婚を考えた女もいたんだけど…俺の方も縁が無かったのか？』

俺の言葉に、佐和子は微笑み続けていた。

俺はそんな佐和子を見つめながら——佐和子と結婚するのだからうな…と確信した。

「——パパ！」

俺の顔を見るなり、奈菜が部屋から飛び出して来た。

「おお！奈菜、遅くなったね！」

俺は奈菜を抱きかかえ、頬にキスをした。

「奈菜ちゃん、忘れ物はない？」

「なあ〜い！！」

保育園の先生の言葉に、奈菜は元気に返事をした。

「…あのお…奈菜ちゃんのパパさん…」

「はい？」

まだ若い保育園の先生はもじもじしながら言った。

「奥様に伝えて下さい。この間出版された本読みました！すつごく勉強になりますって！！」

またか…

「はい、伝えておきますよ。これからも応援してやって下さい」

「はい！もちろんです！」

その先生は興奮した様子で頬を赤めていた。

そう、佐和子は今日日本中の主婦達のカリスマ的存在になっていた。事の発端は佐和子がつ通っていた料理学校の先生だった。その先生はとても有名な先生で、レギュラーで料理番組を担当したり料理本を書いたり、日本中の女性のお手本のような人物だった。その先生が新しく始まる料理番組の収録目前に体調を崩し、入院せざるを得ない状態になった。そこでその先生は教え子の中でも群を抜いていた佐和子に代理を頼んだのだ。佐和子は最初断っていたが、病身を押して家まで頼みに来た恩師に根負けし、渋々代理を引き受けた。そしてその番組が当たり、佐和子は一躍時の人となった。

それから2年……佐和子の収入はあつという間に俺の収入を上回り、結婚当初から計画を立て、やつとの思いで建てた夢のマイホーム（ローンは俺が払っている）は“佐和子御殿”と呼ばれるようになった。

「パパあゝママはいつ帰って来るの？」

奈葉は口一杯にご飯を頬張りながら訊いてきた。俺は壁の時計に目をやり、時刻が7時15分になるうとしているのを確認した。

「もう少し遅くなるかな…パパと風呂に入るか？」

「うん！」

確かに、佐和子は良くやっていた。昼過ぎまで料理番組の収録や恩師の助手をし、そして夕方には一旦帰って来て夕飯の支度をしてからまた仕事に出掛ける。休みの日は掃除洗濯と動き回り、そんな

ハードな日々の疲れなんか微塵も感じさせない穏やかな笑顔で俺や奈菜を見つめている。

佐和子は完璧な妻だ。

完璧過ぎる……

佐和子はサイボーグだ。血なんか通っていない……サイボーグだ。

「——いやあ、この間の。。。商事との契約、順調らしいね。さすが瀬戸君！君のような有能な社員がいるから我が社は安泰だよ！ガハハハハ！」

「いえ……そんな……」

滅多に入る事の出来ない社長室で、滅多にお目にかかれない社長の前で俺はカチコチに固まっていた。

「……ところで……」

社長はゆっくりと椅子から腰を上げ、俺に近寄った。そして俺に社長室の中央に置かれた革張りのソファに座るように言った。

「奥さんは元気かい？」

「……はい？」

「いやいや、奥さん随分忙しそうだね。……うちの家内が佐和子さんの大ファンでね。」

社長は丸い顔をテカテカさせながら笑った。

「はあ……」

力無く答える俺の前に、社長は佐和子の最新刊の料理本を5冊も並べた。

「奥さんに頼んでくれないかい？」

俺はしばらくその5冊の料理本を見つめた。

「妻のサイン…ですか？」

「そうそう！家内の友達の分もいいかい？家内が約束してきてるんだよ！本当に悪いね！」

俺は佐和子の料理本5冊を紙袋に入れて社長室を後にした。

「瀬戸さん！社長直々に何のお話だったんですか！？」

舛本が目をキラキラさせながら駆け寄って来た。

「？何かもらったんスか？」

「あ？…ああ、なっ何でもないよ」

俺は慌てて紙袋をデスクの下に置いた。

「どうしたんスか？顔色悪いですよ？」

「あ？…ああ…」

胃がキリキリと痛み出した。

『しかし、瀬戸君は幸せ者だねえ』

「…舛本…俺、具合悪いから早退する…」

「え？そっ早退っスか！？大丈夫っスか！？」

『あんな完璧な奥さん、どこ探してもいないよお！』

何なんだよ…

俺だってこんなに頑張ってるじゃないか…こんなに頑張ってるじゃないか？

会社を出た途端、また猛烈な熱気が襲ってきた。キリキリと痛む胃を指で押さえながら俺は駅まで歩いた。

あまりの暑さに、意識が朦朧もつろつとしてきた。額から、こめかみから、背中から止めどなく汗が流れ落ちた。

上着の内ポケットから震動が伝わってきた。

俺は木陰に入り、携帯の着信に出た。

「——あなた？私だけど……ごめんなさい……夜に急に仕事が入ったの。なるべく早く帰るから……夕飯の準備はもうしてあるから……奈菜のお迎え……」

「……いい加減にしろよ……」

「……え？」

「いい加減にしろ！！何なんだお前は！！何様だ！！」

「……あっあなた……」

「何だ！仕事仕事……お前は家庭より仕事が大事なのか！？俺はお前が働かないと食べていけないような生活をさせているか！？」

「……わっ分かったわ、今日の仕事はキャンセルするから……」

「お前は何も分かっていない！！俺がどんな思いでいるか……」

どんな惨めな思いでいるか……お前みたいな完璧な女に分かるはずがない。

「……あなた？」

「もう……いい……」

佐和子の声を遠く感じながら、俺は携帯の電源を切った。

その日の夜、佐和子は本当に仕事をキャンセルして家にいた。俺

は強烈な胃の痛みに苦しんでいた。

コンコン――

「…あなた？具合はどう？」

佐和子の細い声が頭に響いた。

「…お粥…食べれる？何か食べないとお薬飲めないでしょ？」

「…そこ…置いてくれ…」

佐和子がベッドの横にあるテーブルの上にお粥をのせた盆を置く音がした。

「…あなた…」

「…少し眠りたいんだ。お粥は後で食べるから…今日は奈菜の部屋で寝てくれ」

佐和子が小さく頷く気配を感じた。

佐和子は…きつとこう言おうとしたんだ。

<あなたが嫌なら仕事は辞めるわ>

そう言っただけ仕事を辞めるに違いなかった。あいつはそう言う女だ。何でも完璧に出来るくせに、夫の望みならそのすべてを捨てれるんだ。

それから1週間もしない内にこの間の健康診断の結果が出た。俺の結果の入った封筒は、明らかに他の社員より厚みがあった。

「…何か…瀬戸さんの厚くないっすか？」

舛本が余計な一言を言った。

「どこか異常が見つかったんじゃないのか？」

部長がにやにやしながら言った。

「怖い事言わないで下さいよ！」

俺は笑いながら部長に言い返したが…心臓はバクバクしていた。

家に帰り、慌てて封筒の封を切った。

ゆっくり…震える手で結果表を取り出した。結果票以外に長封筒が入っていた。その長封筒の中には――…

胃癌検診の結果票と…大学病院の紹介状が入っていた。

「―――すみませんね、瀬戸さん。お待たせしましたあ…ええと…。。病院の紹介状、拝見しましたよお。」

ガリガリに痩せたその医者 of 喋り方は独特だった。

「まあ、そんなに心配されなくていいですよ。ほとんどの方は二次検査では何の問題も無い場合がほとんどですからねえ…今日は何も食べてきてないですよ？」

「はい…」

この医者 of 独特の喋り方にイライラしながら、俺は小さく頷いた。

「はい、瀬戸さん、それではまず最初にこの薬を飲んですぐにこの薬で流し込んで下さい。それから…」

俺はゲップを堪えながらバリウムを飲み干した。

二次検査を終え、俺は家に帰り何度もトイレに駆け込んだ。

「結果はいつ分かるの？」

佐和子 is 不安げに聞いてきた。

「…来週には分かるそうだ…」

「そう…」

そう言いながら佐和子は俺の前にアイスコーヒーを置いた。

あの日以来、俺達夫婦の会話は一段と減った。

佐和子は前よりは早く帰って来るようになったが…それでも相変わらず日本中の主婦のカリスマ的存在だった。

次の週の水曜日に佐和子と2人で病院へ検査結果を聞きに行った。

1週間前はあんなにくねくねした喋り方をしていた医者の様子が明らかに変だった。妙に、モゴモゴと喋っていた。

「せつ…先生…で、結局どうなんですか？」

俺は堪らず聞き返した。

「ええつと…ですねえ…つまりですねえ…小さな腫瘍が見つかりましてえ…」

俺は頭が真っ白になった。

「え？しゅ…腫瘍ですか！？」

佐和子が慌てて聞き返した。

医者はやはりモゴモゴ喋っていた。何を言っているかよく分からなかった。そして佐和子が妙に落ち着いた声で医者に訊き返していた。

俺は、何も考えられなくなっていた。

「何で洋介なの！？何で洋介が胃癌なのよ！！」

佐和子から連絡を受け、慌てて家に来た俺の母親の声がリビングに響いていた。2階の寝室までよく通る声で泣き崩れているようだった。

随分時間が経ち、親達の声も聞こえなくなった。

寝室のドアがゆっくり開き、佐和子が入って来たのが分かった。

「お袋達…もう帰った？」

「…ええ…さつき…」

佐和子はそう言つと、俺が横になっていたベッドに腰を下ろした。

「あなた…少し、何か食べないと…」

「…クク…こんな時にも食わせようつてするんだな…お前は…」

俺はゆっくり身体を起こし、佐和子を見た。佐和子は笑顔ではなかったが…やはり落ち着いた表情をしていた。

「…佐和子…仕事、続けるよ…」

「え？…」

「俺はもうそんなに長くない…だから仕事は辞めるな…」

佐和子の表情が一瞬曇った。でもすぐにいつものように落ち着いた表情に戻った。

「何言つてるのよ、あなた。手術すれば大丈夫だつて…先生もおつしやつてたじゃないの。少し長めの入院になるかもしれないけど、心配いらないわ」

確かに…あの医者はおどおどしながらそう言っていた。正確には佐和子に言わせられていたような感じだった。

「…今は食べる気がしないんだ。少し1人にしといてくれないか？」  
俺の言葉に佐和子は小さく頷いて、寝室から出て行った。

俺はしばらくの間、何も考えられなかった。置時計の力チ力チという音だけが妙に頭に響いた。

そして、自分が泣いている事に気が付いた。

俺の人生つて何だったのか？これで良かったのか？…そんな事を考えながら、佐和子に気付かれないように声を殺して泣き続けた。

長い時間泣き続けて、少しだけ気持ちがすっきりしてきた。

そしてまた考えた。

俺がいなくても、佐和子は大丈夫だ。佐和子なら立派に奈菜を育てられる。佐和子はそういう女だ。佐和子は強い女だ。佐和子は完

壁過ぎる女だ。

数日後、部長にだけ事情を説明した。

「…そうか…それでいつから入院なんだ？」

「はい、担当している仕事をある程度片付けてからと考えているので…1カ月以内には…」

「そんなに間を置いて大丈夫なのか？…まあ、瀬戸君の仕事は特別だからな…君がそうしてくれると会社としても助かるんだが…本当に大丈夫か？」

部長は心配げな表情で俺を見ていた。

「大丈夫ですよ。医者にも許可はもらってますから…」

「そうか…分かった。ただ無理だけはするなよ。それから有休の申請書とか色々手続きがあるだろうから…山田君にはすぐ準備するよに私から伝えておくからな」

「はい、有難うございます…」

「それから…」

部長の言葉に俺は顔を上げた。

「私の親戚で君と同じ病気になったのがいるんだ。その時担当した医者がとても腕の良い医者で、その親戚は今も元気に働いてるよ。もし良かったらその先生に相談してみないか？」

部長は真剣な眼差しでそう言ってくれた。

「…はい…考えておきます。ありがとうございます…」

俺は込み上げる涙を堪えながら、部長に頭を下げた。

そして俺は、佐和子に部長の話はしなかった。佐和子は俺の入院に備えて、自分の仕事を調整しようとしていた。

「パパあゝどこか行くの？」

奈菜が瞳を潤ませながら訊いてきた。

「…そうだよ。病院に入院するんだよ」

「…にゅういん？」

「パパは悪い病気を治すために病院に行くのよ。治ったらすぐ帰ってくるわよ、奈菜」

リビングで洗濯物を畳みながら、佐和子は言った。

「ホントにすぐ帰ってくる？」

「…ああ…」

俺の言葉に奈菜はにこつと笑った。

明日から入院という日の夜中、俺は喉が渇き、キッチンへ向かった。

階段を下りてすぐ、リビングから小さい明りが洩れているのに気が付いた。俺は静かにリビングを覗いた。

佐和子がリビングの中央に置かれたテーブルの椅子に座っていた。こんな時間に何をしているんだ？

「…さわ…」

俺はハツとした。

佐和子の細い身体が小さく、小さく震えていた。

「…ッッッッ…ッッッッ…」

佐和子の嗚咽は、真夜中のシンとした空気を震わせていた。

佐和子が――あの佐和子が泣いていた。1人で泣いていた。

あの強い女が…

あの何でも完璧にこなす女が…

あの佐和子が泣き崩れていた。

俺はそんな佐和子を黙って見つめていた。身体が動かなかった。声を詰まらせて泣いている佐和子に声を掛ける事が出来なかった。

しばらくして、佐和子は大きく深呼吸して天井を見つめた。その横顔は……信じられないくらい凜として美しかった。

もう、泣かない。

佐和子の強い意志を感じた。

佐和子は今までそうやって色々な事を乗り越えてきたんだ。そうやって強く美しく生きてきたんだ。

それなのに……俺は何だ？

まだ何も始っていないのに、もう生きる事を諦めていた。まだやるべき事はたくさんあるのに、何もかも放り出そうとしていた。

俺は佐和子に気付かれないように静かに2階へ上がった。ベッドに潜り込み、ざわざわと込み上げる情熱を感じていた。

大丈夫、まだ間に合う。まだ間に合う。

次の日、俺は病院へ行く前に会社へ立ち寄り、部長にこの間部長

が言っていた名医を紹介してくれるよう頼んだ。部長は快く引き受けてくれた。

部長の話を聞いて、佐和子は嬉しそうに微笑んだ。それから2人で病院へ行った。

病院の待合室で、名前を呼ばれるのを待っているとあの妙な喋り方の医者が近寄って来た。

「…やつ…やゃ！瀬戸さ〜ん！お待たせしましたあ〜…さっ！こちらへ！」

今度は妙なテンションでくねくねと喋る医者に、俺も佐和子も顔をしかめながら付いて行った。

「っ申し訳ありませんでしたあ！…！」

病院の応接室に入るなり、その医者と看護婦長が俺達に深々と頭を下げながら大声で叫んだ。俺達はワケが分からず、ポカンとしてしまった。

「…あの…」

「本当に申し訳ありませんでしたあ！…！」

「…いや、だから何が？…！」

「…私のちよつとしたミスですなえ〜…あの…瀬戸さんの胃には何の異常もですね〜…無かったと言いますか…ですねえ…」

俺は目が点になった。

「先生！ハッキリおっしゃって下さい！」

今まで聞いた事のないくらい大きな声で、佐和子が叫んだ。

「瀬戸さんの胃には腫瘍なんて出来ていませんでした！」

婦長の言葉に、俺も佐和子も固まった。

「本当に申し訳ありませんでした！今後このような事のないよう最善を尽くしますので！検査費用もいりませんので！どうかこの事はここだけの話に…」

婦長はテキパキと、でかい菓子折りと白い長封筒を俺の前に差し出した。

その菓子折りの包装紙は白地に黄色のストライプ柄だった。

佐和子や奈菜の好物の、＜ルウーシェ＞の高級洋菓子セット。

「…な…何て事を…」

震え出した佐和子を、俺は止めた。

「そしたら…俺は大丈夫なんですね？胃癌なんかじゃないんですね？まだまだ生きられるんですね？」

「もっもちろんですよ！50年でも60年でも生きられますよお！！」

へらへらと笑いながら言う医者にムツとしながらも、俺はその菓子折りだけを受け取った。

「ここだけの話には出来ませんよ。会社には報告しないと、こっちも色々と手続きしてきたんですから…」

俺の言葉にその医者と婦長ががっくりとうなだれた。

「でも、俺は別に怒ってませんから。もうこんな事のないようにして下さい」

「え？…」

その医者と婦長と、そして佐和子が俺を見つめた。

「佐和子、行くぞ」

「はっ…はい！」

俺と佐和子はそのまま病院を出た。

秋の予感を感じる風が頬を撫でた。俺と佐和子は2人並んで駐車場まで歩いた。

ふと、佐和子の顔を見ると、佐和子が涙ぐんでいた。

「何泣いてるんだよ」

「だって…こんなバカな話無いじゃない！こんな……あなた、念のために別の病院でもう一度調べてもらった方がいいんじゃないかしら？」

「ああ…そうだな…」

佐和子の言葉に俺は頷いた。そして佐和子の肩に手を置いた。

「どちらにしても、俺はまだまだ死ねないって事だな。お前もいるし、奈菜もいるし、家のローンもまだまだ先が長いし……」

佐和子がくすくすと笑い出した。俺も笑った。2人でこんなに笑ったのは久し振りだった。しばらく笑い続けたら、今度は腹が減ってきた。

「何かウマいもんでも食って帰るか！」

「ええ……そうしましょう！」

俺と佐和子は車の所まで急ぎ足で行った。

「——少し胃の表面が荒れてはいますが、大丈夫。この程度ならお薬で治りますよ」

翌日、再検査に訪れた病院の若い医者からそう言われた。

「はい。ありがとうございました」

俺はホッと安心した。

「僕達ぐらいの世代でも、ストレスとかで慢性的な胃炎になる傾向が多いんですね。瀬戸さん、僕達は日本を背負って立つ大事な身体です。お互い頑張って行きましょう！」

その若い医者は白い歯ちらつと見せ、爽やかに笑った。

俺も爽やかな気持ちで笑い返した。

< 3 > 余命60年

E  
N  
D

## < 4 > キキヨウ

僕達の地球<sup>ほし</sup>

## < 4 > キキヨウ

「——なあ、美羽…俺達そろそろ別れないか？」

健太の言葉に、宇治金時パフェを食べていた私の手が一瞬止まった。

「…え？何？」

「…だから…俺達、そろそろ…」

私は再び宇治金時パフェを口いっぱい頬張った。

「…ん…頭キンキンするう…！」

「おい！美羽って！」

健太がいつものように苦笑いしながら私を見ていた。

「…聞いているわよ。別れたいんでしょ？」

私の言葉に、健太はまだ苦笑いをしたままだった。

「その方がお互いに良くないか？お前もそう思ってただろ？」

「…うん…そうだね。エッチも全然しなくなってたし…良い時期かもね」

健太はくくつと笑った。

「ちよつとおくいくら嬉しいからってここで笑わなくてもいいんじゃない？相変わらずデリカシーないわね！」

私は本気でムツとして…でもやっぱり笑顔でそう言っていた。

「…いや…そういう意味じゃなくて、本当にお前ってすげえなって感心してたんだ」

「は？」

「お前なら、俺なんかいなくても大丈夫だよ」

6年も付き合ってたのに… あんたは私の事なんかこれっぽっちも理解してなかったんだな！

このバカ男！！

「——目、腫れてないね」

同じ会社で働いている親友の結己ゆいみが私の顔をしげしげと見ながら言った。

「何で私の目が腫れるの？」

「だって、あんた25歳の誕生日に6年間も付き合ってた男に振られたんでしょ？何で泣き明かした痕跡が微塵もないワケ？てか、何普通にもりもり弁当食ってるワケ？」

「そんな事言われてもなあ…」

タコさんウインナーを口に運びながら言った私の言葉に、結己は呆れたようにため息を吐いた。

「何であんたっていつもそうなの！？そうやってヘラヘラしちゃって！いつも損してるじゃない！6年も付き合ってたんだよ！6年も！それを何も責めずにあっさり健太君の言う事聞いちゃったワケ！？」

「もう…そんなに熱くなんないでよ！仕方無いじゃん！実際もう冷めてはいたんだから…」

大好物の卵焼きをお箸で半分に切りながら、私は言った。

「ああんもう！美羽！何であんたはそんなにお人好しなのよ！！」

「去る者は追わず…これが私の理念…」

私はそう言つて、頷きながらご飯を頬張つた。

「何が去る者は追わずよ！来る男も去る男もいなかったくせに！」

本当に結己は失礼な親友だ。

でも間違いではない……。

初めて付き合つた男性は健太。

初めてキスした男性も健太。

初めてエッチした男性も……健太。

確かに健太は私にとって何でもかんでも初めての男だつた。

『その方がお互い良くないか？お前もそう思つてただろ？』

よく言うよ。私がそう思つてるなんて何で言い切れる？

知ってるんだぞ！あんたに好きな女が出来た事。だから私の事邪魔になつたんでしょ？

こんなに悶々と考えていても、涙なんて一滴も流れてこない。

いつからこんなになつたんだ？

ずっと前からだ。

誰のせいだ？

あの人のせいだ。

絶対、ママのせいだ。

「——どうして？どうして健太君と別れちゃつたの？」

大きな瞳に涙をいっぱい溜めて…ママは震える声で私に言った。

「…どうしてって…色々あるのよ！もう！なんでママが泣くのよ…」  
「だつてえ…あんなに仲良かったじゃない！結婚するって言つてたじゃない！うわあ…ん！」

私は本当にウンザリしながらテーブルの上にあるティッシュ箱に手を伸ばした。

「もう泣かないでよ…ママ…」

ママは私を手渡したティッシュで勢いよく鼻をかんだ。

「グス…グス…健太君ってバカな男よ！美羽ちゃんみたいな良い子と別れちゃうなんて…ホントにバカよ…グス…」

「…うん…そうだね…」

顔を真っ赤にして泣きじゃくるママを見つめながら、私は……そんなママをとて羨ましく思っていた。

私のママは本当に可愛い人だ。

お人形さんのような容姿に華奢な身体。ころころと笑う明るい笑顔。そしてゆるゆるの涙腺……私のママは本当に感受性豊かな人なのだ。

嬉しい事や悲しい事があれば、それが自分の事じゃなくても、自分の事のように涙を流す。

私は小さい頃からそんなママを見て育った。そしてそんなママを死んだパパの代わりに守らなくてはいけないと思い、私は強くなろうと決心した。

私はそうやって泣き方を忘れてしまった。

「——ああ…寒い…寒過ぎる…」

キンキンに冷えた狭いオフィスの自分のデスクで、私と結己は力タカタ震えていた。

「まったく…うちの会社ってさあ、全然時代の流れに乗ってないよね」

「うん…まあ、小さな会社だからね」

結己の言葉に私は頷いた。

「見て！設定温度21　！！少し上げてもいいかなあ？」

同じ女子社員がエアコンの設定温度を見ながら言った。

「上げちゃいなよ！」

結己はブランケットをお腹の辺りまで広げながら言った。

「こら！何やってるんだ！外はどれだけ暑いと思ってるんだ！外回りの連中の事も考えろ！！」

総務主任の怒鳴り声が狭いオフィスに響いた。

「…何よお、自分だって一步も外に出なくせにねえ…」

実際、外回りの社員は外とオフィスの温度差に結構堪えていた。

だからこんなにオフィスをキンキンに冷やさなくてもいいのだ。でも社長がものすごい暑がりな人で、だからオフィスはいつもキンキンに冷やされていた。

「…うちの会社って結構赤字なんだってよ」

結己が他の女子社員と喋り続けていた。

その時だった。デスクの上に置いていた携帯が鳴った。私は慌てて携帯を持ってオフィスを出た。自動ドアの近くに置いてある観葉植物の横で、私は携帯に出た。

「…もしもし？」

「——もしもし？美羽ちゃん？」

聞き覚えのない声。

「…はい…どちら様ですか？」

「私ね、あなたのお母さんのお友達の緑川っていう者なんだけどね…」

ママの友達？緑川って…どこかで聞いたような…

「艶子さんが参加されてる“グリーン・アース”の責任者って言うたら分かるかしら？」

「ああ！！」

思い出した。ママは1年ぐらい前から地域のボランティア活動に積極的に参加していた。そのボランティア会の名前が確か…“グリーン・アース”とか言う名前だった。

「ごめんなさいね、いきなりお電話しちゃって…実はね、今日の活動中に艶子さん具合悪くなっちゃってね…」

「え！？」

「もう大丈夫よ、心配しないで。私の家で休んでるから…それでね、美羽ちゃんの仕事終わってからでいいから艶子さん迎えに来てくれない？家の場所教えるから…」

「…あっはい！分かりました！ご迷惑掛けてすいませんでした…」

「…いいのよ、気にしないで。今近くにメモ用紙ある？」

私は慌ててオフィスに戻った。緑川さんが言う通りにメモし、携帯を切った。

なんか…とっても優しくそうな人だったなあ…

ママはよくこの緑川さんの話をしていた。

旦那さんが自治会長で、奥さんは地域婦人会の会長。地球環境問題に夫婦でとても熱心で、“グリーン・アース”という会を作り、地域の清掃活動や学校や公共施設の花壇の手入れなどを率先してし続けていた…と、ママは熱く語っていた。

ママはこの緑川夫婦をかなり尊敬していた。

私は仕事を終えて、急いで家へ帰り、ママの愛車イエローマーチを走らせた。  
緑川さんに教えてもらった家は…閑静な住宅地で一際目立つ立派な一軒家だった。

——ピンポン…

インターホンを押すと、しばらくしてあの優しい声がスピーカーから漏れた。

「——美羽ちゃんね？ちょっと待ってて」

そしてすぐに立派なドアが開き、緑川夫人が顔を出した。

「いらつしゃい。」

その優しい声と同様にとてもしゃやかな表情のキレイな女性だった。

「…本当にご迷惑お掛けしました…」

広々とした玄関ホールに入る前に私は緑川夫人に頭を下げた。

「そんなに気にしなくていいのよ！艶子さんにはいつもお世話になってるんだから！さっ上がつて！」

私は玄関ホールに飾られた大きい観葉植物に目を見張った。そして通されたリビングにもたくさんの青々とした観葉植物が飾られていた。私はその立派な観葉植物に感動しながら……リビングの中央に置かれた革張りのソファに腰を下ろし、お茶を飲みながら寛いでいるママの姿を見て力が抜けた。

「…ママ…」

「あら！美羽ちゃん！お迎えに来てくれたのね！」

そう言いながらママは嬉しそうに頬を赤めた。

「何よ！心配して来たのに…全然大丈夫みたいじゃない！」

「もう！そんな事言わないの！それより、すごいでしょ！なんだか森の中にいるみたいよね！良い気持ち…」

ママは大きく深呼吸して天井を仰いだ。私はやれやれとため息を吐いて、そのまま外に目をやった。そこにはこれまた立派なお庭が

存在した。

「お庭も素敵でしょ！可愛いお花以外にハーブとかもたくさん植えられてるのよ！」

ママは少し興奮気味に語り出した。

「…本当に具合悪いの？」

そんな冷たい言葉を吐いた時、緑川夫人がどこからか戻ってきた。  
「あら！美羽ちゃん！そんなところに立ってないで早くお座りなさいな！」

そう言いながら緑川夫人はテーブルの上に私の分のお茶を準備してくれた。

「本当にすいません！すぐに連れて帰りますから！」

「そんな事言わないで！艶子さんの調子もせつかく良くなってきたんだから少し寛いでいきなさいよ。…もしかして、これから何か用事あるの？」

「用事何かないですよ！彼氏と別れたばかりなんだから！ね、美羽ちゃん！」

ニコニコしながら言ったママを睨みながら、私は出されたお茶を一口飲んだ。

「…ん…うっまあゝい！…このお茶すごく美味しい！」

私は思わず叫んだ。

「でしょ！でしょ！」

ママが足をバタバタさせながら言った。ママは嬉しくなると子供のように足をバタバタさせる癖がある。

「お庭で摘んだハーブのお茶なのよ。とても身体にいいの。特に冷え症の女性には効果あるわよ」

「へえ…」

私は感心しながらそのお茶を飲み干した。

「ところで嘉子さん、来週の活動の事なんですけど…」

「もう、いいって！体調良くなってからまた参加してよ！今はゆっくり休んで！ね？艶子さん。」

2人の会話を聞きながら、私は広々としたリビングを見渡していた。

ひんやりとした空気が本当に心地よくて、少し眠くなってきた。

「ね！美羽ちゃん！あなた土日休みじゃない！土曜日の活動に参加してよ！」

ママの元気な声に私はハツとした。

「ダメよ！艶子さん！美羽ちゃんだって忙しいでしょ！」

「忙しくないって！ねえ？美羽ちゃん！ちょうどいいじゃない！もう暇になったんだから！」

瞳をキラキラ輝かせながら言うママの顔を見ながら…私は肩の力が抜けるのを感じた。

「本当に暇なんでもいいですよ。何をしたらいいんですか？」

次の週の土曜日、私は嘉子さんに言われたとおり顔と身体に入念に日焼け止めクリームを塗り、長袖シャツを羽織り、首にタオルを巻き、つばの広い帽子を被って集合場所の森林公園へ出掛けた。

朝の7時半。日差しは強かったけど風がとても気持ち良かった。

「美羽ちゃあゝん！！」

森林公園の中央にある噴水の横で嘉子さんとその仲間の人達が手を振った。

「おはようございます！」

「おはよう！準備万端ね！」

私の完全防備の姿を見て、嘉子さんが微笑んだ。

「君が艶子ちゃんの娘さんかい？あんまし似てないね」

1人のオヤジが残念そうに言った。

「美羽ちゃんはクール美人よね！」

嘉子さんの言葉に、そこまで気を遣わなくてもいいのに…と思いながら苦笑した。

それからすぐに、集まった10名のおじちゃんおばちゃん達と一緒に公園の清掃を始めた。この清掃活動は…思ってた以上にハードだった。

不法に捨てられたゴミの量はかなりのモノで、すぐに袋いっぱいになった。

「ああ！おねえちゃん！その缶はこっちの袋だよ！」

不法に捨てられたゴミを拾ってやってるのになお且つ分別までしちゃうなんて…このおじちゃんおばちゃん達をかなり尊敬した。

「美羽ちゃん！こつち来て！」

嘉子さんは駆け寄った私に百合のような白い豪華な花を指差した。

「わあ！なんか百合みたい！」

「そうそう、ヤマユリよ」

「え！？ユリって高価なお花なんですよね？こんなところに普通に咲いてるんですか！？」

驚いた表情で言う私に嘉子さんは微笑んだ。

「ここのお花も木もみんな協力して育ててるから、だから毎年こんな立派な花を咲かせるのよ。ヤマユリわね、とてもいい香りがするの」

私はヤマユリに顔を近付けてみた。甘いのに、なんだかとても爽やかな香りが私の顔の周りに流れた。

「本当だ…いい香り…」

「ね？なんだかホツとする香りでしょ？」

「あっはい！そう！ホツとしますね！」

私の言葉に、嘉子さんはふふつと笑った。

その日の活動の後も嘉子さんの家でお茶をご馳走になった。

「このお茶も美味しい！」

「そのお茶もお庭で摘んだハーブなのよ。美肌効果があるの。今日みたいにたくさん紫外線浴びた日なんかに飲むといいのよ」

嘉子さんの言葉に、私はそのお茶を3杯も飲んだ。

「本当に今日はありがとうね！あなたみたいな若い子が参加してくれて本当に嬉しいわ」

「いいえ、あんまりお役に立てずにすいませんでした」

「そんな事ないわよ！また暇な時があったらよろしくね！」

嘉子さんの言葉に私は微笑みながら頷いた。

それから私は本当に暇だったので、“グリーン・アース”の活動に参加するようになった。体力的にはかなりきつかったけど、それ以上にみんなで頑張ったという達成感みたいな雰囲気楽しかった。

それに…活動に参加している時だけ、健太の事を考えずにすんだ。

「——美羽さあ…ちよつと最近肌の調子かなり良くない？」

会社の昼休みに、トイレで化粧直ししている時、結己が言った。

「私も前から思ってたんだ！何？何かやってるの？」

「…別に何も…」

同じ女子社員の言葉に、つい嬉しくてニヤニヤしながら私は答えた。

「何よ！その顔！何やってるのよ！教えなさいよ！」

結己の気迫に圧倒され、私はボランティア活動の話と嘉子さんの

特製美肌ドリンクの話をした。

「ボランティアはいいけど…その特製美肌ドリンク飲みたあゝい！」

「何贅沢言ってるのよ！たくさん汗かいて、自然の中でストレス発散して飲むから効果があるのよ！」

私は本気でムツとして言った。

「…ねえ、今度私も一緒に行ってもいい？」

ボランティア活動なんて全く興味が無く、汗をかくなんて大嫌い  
なはずの結己が珍しく頼んできた。

「うん…別にいいけど…」

私は少し驚いたけど、次の活動の日に結己を連れて行く事にした。

「——暑い…きつい…だるい…」

清掃活動が始まってから1時間もしないうちに結己が根を上げ始めた。

今回の清掃場所は。山の山道と頂上付近だった。要するに登山をしながらの清掃活動だった。何回も活動に参加していた私でも結構きつかった。

「大丈夫？もうすぐ休憩地点だから頑張ろうよ！」

結己は口を尖らせたまま、私の後に付いた。

ママは…驚くほど慣れた足取りで、おじちゃんやおばちゃん達と先頭を行っていた。

「はぁーい！みなさん！お疲れ様！頂上まであと少しですからね！もうひと踏ん張りですよ！」

「はぁーい！！」

嘉子さんの言葉に、参加した人間全員が元気に返事をした。

「結己ちゃん！大丈夫？」

「…はい、もう大丈夫です。心配掛けちゃってすみません…」

さっきより顔色が良くなってきた結己は申し訳なさそうに笑っていた。

「大分身体も慣れてきたみたいね！頂上に着いたらすぐお昼にしましょうね！」

「はい！！」

私と結己は猛烈に力が湧いてきた。

それからみんなでゴミ拾いをしながら頂上を目指した。

「ねえ…美羽…」

「うん？」

「…少しは落ち着いた？」

結己の言葉に私はしばらく黙っていた。

そうか…結己は私の事心配してくれてたんだ…だからボランティア活動に参加するって言い出したんだ。

「…完全じゃないけど…大分落ち着いたよ」

私の言葉に、結己は何か言いかけてやめた。

結己が何を言おうとしたのか、なんとなく分かっていた。

そう、私は今初めて結己に本心を話したのだ。

山頂に近付くにつれ、なんだかイイ匂いが漂ってきた。ちょうど山頂の入口付近で、嘉子さんの旦那さんが笑いながら立っていた。  
「やぁ！みなさん！お疲れ様！お腹空いたでしょう！お昼はバーベ

キューですよ!!」

「バーベキュー!!」

参加者みんなの足が一気に力強くなった。おじちゃんもおばちゃんもママも私も結己も…みんな一心不乱にバーベキュー目指して山頂まで駆け上がった。

「うつめえー!!」

結己が叫んだ。その声にみんながドツと笑った。

「こんなにお肉食べたの何年ぶり!？」

「ちよつと美羽!その言い方やめなさい!家で何も食べてないみたいじゃない!」

ママが焼き力ボチャをほくほくと頬張りながら怒った。

「いやあーみなさん、今日は本当にお疲れ様でした。見て下さい!こんなに間違えるようにキレイになりました!今回のこのお昼は自治会の方から皆様の日頃の頑張りのお礼として準備してもらいました。みなさん、お腹いっぱい食べて、またキレイに後片付けして帰りましょうね!」

「はあーい!!」

本当にお腹いっぱい食べた後、嘉子さんにこの山の絶景スポットまで連れて行ってもらった。

「ほら!ここよ!いい眺めでしょ!!」

「うわあー!!」

私と結己とママは感嘆の声を上げた。

真つ青な夏の青空に真つ白なモクモクとした入道雲。その下には空と雲がくつきりと映った田んぼがキレイにどこまでも並んで続いていた。

「ああ!空気が美味しい!!」

私達は大きく深呼吸をした。澄んだ空気が身体中に満ち溢れ、身体の中にある嫌なモノが一気に出てきそうだった。

「少しは給料上げる——！！！！」

結己がいきなり叫んだ。

「結己ちゃんったら！」

ママと嘉子さんが大笑いした。

私は心臓がドキドキしていた。

『お前は、俺なんかいなくても大丈夫だよ』

「……勝手な事言ってんじゃねえよ……」

「え？」

結己達が私を見た。

私は大きく息を吸い込んだ。

「私の6年間返せ——！！！！」

結己達が驚いた表情で私を見ていた。でももうそんな事どうでもよかった。

「勝手な事言ってんじゃねえぞおおお——！！！！」

好きな人が出来たんなら、そう言えればいいじゃんか！

「健太のばあかあやあるおおお——！！！！」

「家の可愛い娘を振るなんてえ！！何様だああ——！！！！」  
ママ！！

「お前なんかあ！！馬に蹴られて死んじまええええ——！！！！」  
「！」

結己！！

「健太のアホおおお——！！！！」

嘉子さん！？

それから4人で思いつきり叫び続けた。泣きながら叫び続けた。

泣くって…こんなに気持ち良かったっけ？

私はそんな事を実感しながら、顔をぐしゃぐしゃにして泣いた。  
ママも結己も嘉子さんも一緒に泣いてくれた。

そして4人で笑った。お腹がよじれる位笑い続けた。

本当に、本当にスツキリ爽快な気分だった。

その日以来、私はママほどじゃないけどなんとか泣けるようになった。  
った。

泣くって不思議だ。

思いつきり泣けたら、ちゃんと笑えるようになるんだよ。

今日も快晴。花々が咲き誇る森林公園の清掃日。

私は少し早めに公園へ行き、花壇の前に立った。紫色の小さな花が緑色の草木の間からチラチラと咲いていた。

この花可愛い…何て言う花だろう？

「——その花の名前、知っていますか？」

男性の声に私は驚いて振り向いた。

そこには黄色いポロシャツの上に白のパーカーを羽織り、ブルージーンズを穿いた若い男性が立っていた。

かつ…

「あ…ごめん！驚かすつもりはなかったんだ」

かつこいいい！！

「あら！美羽ちゃん！もう来てたのね！」

嘉子さんが穏やかに微笑みながら駆け寄ってきた。

「あらやだ！紹介する前に声掛けちゃったの？美羽ちゃん、この子私の息子の竜輝。先週仕事で行ったアメリカから帰国したのよ。」

竜輝、この子が美羽ちゃん。いつも活動に参加してくれてるの」

その竜輝という人は私を見て微笑んだ。

「はじめまして、美羽ちゃん」

そのキラキラした笑顔に、私はとろけてしまいそうだった。

<  
4  
>  
キ  
キ  
ヨ  
ウ

E  
N  
D

## < 5 > ヒーローの証

僕達の地球<sup>ほし</sup>

### < 5 > ヒーローの証

俺の名前は原田正敏、29歳。小学校の教師をやっている。…別に情熱があつて教師という職業を選んだんじゃない。父親が教師だったからその流れで俺も教師になった。親や親戚中がそれを望んだんだ。

正直、子供は嫌いだ。

「はあ！？じゃあ何ですか！？先生は家の子が悪いとおっしゃるんですか！？」

人間食つてきたの？って思いたくなるくらい真っ赤な口紅のおばさんが俺に唾を飛ばしながらすごい剣幕で詰め寄ってきた。

「…いえ…別にたくみ君が悪いなんて言つてないでしょう？」

「家のゆういちが悪いとでもお！？」

グレーのシャツの脇から汗を滲ませながらゆういちの母親が吠えた。

「いやあ…ゆういち君もそんなに悪くないですし…」

この2人の母親に挟まれながら、俺はオロオロするしかなかった。

「——は？ケンカの原因は消しゴムなの？」

俺の恋人で違う小学校の教師、橘真登香は笑いながら言った。

「そうなんだ…ゆういちがたくみから借りた消しゴムのまだ使つて

いない角っこを使っただ。そしたらたくみが激怒してさああんまりすごい剣幕だったからゆういちはずぐ謝っただけど、たくみは許さなかったワケよ。それで母親に泣いて訴えてさあそのゴリラみたいな母親が学校に乗り込んできたんだ」

俺は真登香の作ったタラコスパを箸で頬張りながら言った。真登香はくすくす笑い出した。

「笑い事じゃないんだぞ！すっげえ大変だったんだからな！」

「うん、うん、分かるって！しかし正ちゃんの学校ってそんな親ばかりじゃない？」

確かに、俺が勤める学校の生徒の親は変わり者が多い…いや、親だけじゃない。生徒達も変なのばかりだ。

特に…6年3組！！

「本当に子供ってすごいよねー！どの子も発想が斬新なのよ！今日の理科の実験の時もね…」

「子供は単純なだけだよ。大人と違って色々考えなくていいから？だから奇抜な事ばかりやらかすんだよ！」

俺はイライラしながら言った。

「もう…せつかく6年の担任になれたのに…もつと気持ちに余裕持たないともたないわよ、正ちゃん」

「そんな事言っただってな！あいつらは怪物なんだぞ！化け物なんだぞ！だから担任なんてやりたくなかったんだ！」

「…正ちゃん…子供を化け物なんて言っちゃダメよ…」

真登香が寂しそうな、悲しそうな表情で俺を見ていた。俺はなんだか居た堪れない気持ちになった。

別に俺だって子供が憎くいワケじゃない。ただ、あんまり関わり

合いたくないんだ。

俺はあの子供独特の世界観には付いていけない。

「……先生……原田先生……」

3限目の授業が終わり職員室に戻ろうとした俺に、6年3組のさくらが目を潤ませながら言ってきた。

今度は何だよ……

「……どうした？さくらさん？」

「……あのね、先生……あの……」

さくらは言いにくそうにしながらうつむいた。

「ハッキリ言わないと分からないよ？」

「……あのね……今日ね、お母さんに買ってもらったプーさんの色鉛筆持ってきたの」

「……うん。」

「……でね……みおちゃんがお貸してって言うから私すぐ返してねって約束してね、みおちゃんに貸してあげたの……」

「……また貸してあげたのか？……それでまた返してくれないのか？……俺の言葉にさくらはぼろぼろと涙を流しながら頷いた。

「……ああ……もう泣くなよ。先生言っただろ？みおさんにはもう何も貸しちゃいけないって」

「……っだったっ……ヒック……貸してあげないとっ……いじわるっ……ヒック……されるもん……ヒック……」

俺はため息を小さく吐きながら、さくらと共に教室へ戻った。

「ちゃんと返したもん！」

みおはぶくつと膨れた頬をさらに膨らませ、口を尖らせた。

「でもさくらさんはまだ返してもらってないって言ってるよ」

俺はそう言いながら俺の後ろに隠れたままのさくらを見下ろした。

「何でそんな事言うの？さくらちゃん、さっき返したじゃない！」

「…つまだ…返してもらってないもん!…」

声を震わせながらさくらは言った。

このみおは本当に癖が悪い。被害者はさくらだけではなかった。

別の子はミッキーの色ペン、また別の子はキティのノート…最初はすぐ返すような事言って、そのまま家に持って帰り自分のものにしてた。さすがにいけないと思い、みおの親に現状を説明した。

『そう言われましてもね…みおは知らないって言ってるし…本当はその子らが嘔吐してるんじゃないですかね?』

と言って全く相手にされなかった。自分の子供の事なのに本当に関心が無い様子だった。

親が親なら、子も子だ。

「…また先生からみおさんに言ってみるから、とにかく今日は諦めなさい」

俺の言葉にさくらは納得いかない様子だったが、渋々頷いた。

今回もすぐには解決しないだろう…

俺はそんな事を悶々と考えながら…そしてもう一つの不安を抱いていた。その不安は翌日見事に的中した。

「——先生!原田先生!お電話ですよ」井口さくらさんのお母さん!」

はあ…やっぱりきたか…

俺は電話に出る前からどっと疲れを感じていた。

「——それで?そのお母さんと2時間も話したの?」

真登香が夕飯の後片付けをしながら言った。

「そう…もう耳が痛いよ…」

結局2時間、生徒達に自習させた。授業は遅れるし、教頭には説教されるし…もう最悪だ。

「…ねえ…正ちゃん…ちょっと話あるんだけど…」

「あ？話？悪いけど明日にして。俺もう疲れたから寝るわ。勝手に帰っていいからな」

俺はそう言つて大欠伸をしながら腰を上げた。

「待って…正ちゃん…」

「あ…カギ、ちゃんとかけて行けよ。この間忘れてただろ？」

「…う…うん…ごめん…」

俺はそのまますぐにベッドに倒れ込んだ。台所で真登香が食器を洗っている音を聞きながら、俺はあつと言つ間に眠りに落ちた。

翌日、真登香はアパートには来なかった。まあ、あいつも教師だし忙しいから来ないのだろうと思ひ、俺は真登香が何を話したかったのか気にする事もなく、数日が過ぎていった。

そして、蝉が暑苦しく鳴き叫ぶ日曜日の朝に、家の電話が鳴った。俺は親からだと思ひ、出なかった。その電話はしばらく鳴って止まった。俺はボーとする頭を抱えながら目覚まし時計を掴んだ。まだ7時だった。

こんな朝早くから何だよ…

俺はイライラしながら足元に押しやられていたタオルケットを掴み、自分の身体にかけ直した。

トルウルウルウウ——！！

また電話が鳴り出した。——真登香？俺は携帯の着信履歴を見た。誰も俺の携帯に掛けてはいなかった。そうしている間も電話は鳴り続けていた。俺は仕方無く受話器を上げた。

「……もしもし?」

「……原田様でしょうか?」

まったく聞き覚えのない女の声が響いた。

「はい……何か?」

「私、今日は原田様にとっても大切なお話がありましてお電話致しました!」

勧誘電話か!?

「今日は原田様に課せられた重要な“任務”についてお話致します。その“任務”は私達の地球を救う大切な役割を兼ねており……」  
宗教関係か!!

「おい!朝っぱらから変な話始めるなよ!大体何だ!?あんた!どうやって電話番号や名前調べたんだ!」

「落ち着いて下さい、原田様。今はそんな悠長な事を言っている場合ではございません」

「……はあ?何言ってるんだよ!」

俺は勢いよく電話を切った。そしたらすぐに携帯電話が鳴り出した。俺は飛び上るほど驚き、恐る恐る携帯を覗き込んだ。非通知で鳴り続ける携帯のボタンを震える指で押した。

「何故お切りになりますか!?まだ何もお話ししていませんよ!」  
さつきより息を荒くして女は叫んだ。

「なっ何で携帯番号まで知ってるんだよ!」

「いいですか!これからお話しする事は私達の地球の存続に関わる事なのです!真剣にお聞き下さい!分かりましたね?」

「……はっはい……」

俺はその女の剣幕に圧倒された。

その女は一呼吸置いて、ゆっくり喋り始めた。

「あなたが担任をされていますクラスの生徒の中に、25年後、私達の地球を救う救世主がいらっしゃいます」

「はあ……」

まさか!と、俺は心で大笑いしながらとりあえず女の話の黙って

聞いた。

「その救世主が生命の危機に直面します。私達の救世主を殺そうとする悪魔が現れるのです。その悪魔と闘って、その救世主を守っていただきたいのです」

「何の話をしてるんだ？あんな…」

俺はだんだんバカバカしくなっていた。

「ですから、救世主を狙う悪魔と闘って…」

「いや…そうじゃなくて…俺のクラスに？あのわがままなガキじゃないクラスに救世主？何の冗談だよ！大体、何で俺があんなガキのために身体張らなきゃいけないんだ？」

「あなた、担任ですよネ？」

「そうだけど…いや！そんなワケ分かんない話しないでくれる？何？どっかの宗教関係の人？悪いけど、俺そついうの嫌いだから…」

「切らないで！」

電源を切ろうとした携帯から女の声が飛び出した…と、思うくらいでかい声だった。

「分かりました。ではこうしましょう。今日の原田様のサプライズな出来事を予言いたします。その予言が当たっていれば私の言う事を信じていただけますね？」

「…内容にもよるけど…」

「はい？」

「分かったよ…100%当たってたら一応信じるよ…」

まったく、何でこんな女とせつかくの休みにこんな変な話してんだよ…と、イライラしながら…そのサプライズな出来事に少しだけ興味が湧き…俺はその女の話聞いた。

「では…今日の昼1時15分に恋人の真登香様から携帯にお電話があります」

…ん？真登香！？

「おい！何で真登香の事まで知ってるんだよ！？」

「私の言う事、信じていただけますか？」

「…で！真登香が何だよ！」

「真登香様は『正ちゃん、お昼ご飯食べた？』と言います。原田様は『まだあゝ』と答えます。真登香様『私もまだなの！これから食べに行かない？』原田様『…これから？どこに？』真登香様『。町にカフェレストラン出来たの！そこ行こうよ！』原田様『…っ』」

「ああ！もう！いちいち声色まで真似るなよ！」

俺は俺達の声色まで完璧に似せて話すこの女に、さすがにぞっとした。

「１００%とおっしゃいましたので…」

「もういいよ！気持ち悪いな！…つまり今日の昼に真登香と。町のレストランに行くんだろ？」

「はい。そしてそこで原田様は“本日のランチセット”、真登香様は“夏野菜たっぷりさっぱりリゾット”をご注文されます。」

何でこのクソ暑い時にリゾットなんだよ！

「…で？」

「そのレストランでお食事をされた後、真登香様の大好きな美術館へ行かれます。そこで真登香様からサプライズな報告がございます」

真登香が美術館好きってのも知ってんのかよ…

「…で？そのサプライズな報告って？」

「それはご本人様からお聞き下さい」

女はそう言うといきなり通話を切った。俺はしばらく茫然としていた。

それから俺は女の言っていたPM1時15分まで落ち着かなかった。そしてPM1時15分——俺の携帯が鳴った。

「正ちゃん、お昼ご飯食べた？」

と、いつもの元気な真登香の声が携帯から溢れた。

「…まだ…」

「私もまだなの！これから食べに行かない？」

「これから？…どこに？…」

俺はごくりと唾を飲み込んだ。

あの女の言っていた通り、真登香の希望で。。。町に出来たレストランでランチした。あの女の言っていた通り…俺は本日のランチセツト（席に着いた途端、無性に食べたくなった）、真登香はリゾット…

「…夏にリゾットか？」

「あら？可笑しい？このリゾット冷たくてさっぱりしてて美味しいよ。正ちゃんだって食欲無い時お茶漬けで済ませてるじゃない？」

「…食欲無いのか？」

「…うん…ちよつと夏バテ気味…」

そう言えば…今日の真登香は少しだけ顔色が悪い…。

「ねえ！この後さ、美術館行ってもいい？」

真登香の言葉に、俺は思わず苦笑しながら…鳥肌が立っていた。

夜の6時前に俺は真登香と別れた。帰り道…オレンジ色の燃えるような夕日の中、まだムンツとするアスファルトからの熱気を感じながら俺はフラフラと歩いた。

美術館での真登香のサプライズは…確かにサプライズだった。聞いた途端、頭が混乱した。何で？何で？と…

あんなに注意してたのに…

アパートのドアのカギを開け、部屋に入った途端、俺の携帯が鳴

った。

「ご懐妊、おめでとうございます」

女は淡々と言った。

「何なんだよ…あんた…やっぱりヤバい人？」

「これで私の事、信じていただけましたか？」

「…はあ…」

「せつかくのおめでたい日にため息なんか吐いては幸せが逃げてしまいますよ？」

幸せなんて…とてもまだ実感出来る気分じゃない…

「…世の男性というのは、やって気持ち良ければそれでいいのでしょうか？」

「は？」

「女性というのは、とてもとても尊い存在です。なぜなら原田様がお守りする救世主を誕生させたのは女性でございます。つまり、その女性も救世主という事になります。」

「…でも…男がいないと子供は出来ない…その子の父親も救世主じゃないのか？」

俺は自分の事を棚に上げて…なんだか寂しい気持ちになり、女に反論した。

「今の原田様では、救世主にはなれません。ですが救世主をお守りする事は出来ます。その救世主を守り抜くという事は私達の地球を守る事と同じ意味がございます。原田様、ご自身の置かれた立場をもう一度お考えになり、これほどの徳のある大役を受けられました事の喜びを実感下さいませ」

この女…

「…ところで、その救世主って誰なんだ？」

「…まだ分かりません」

「はあ？」

「では、後日またご連絡致します」

女はそう言ってまたさっさと通話を切った。

「——先生？原田先生？」

日直のやまととあゆが不思議そうに俺の顔を覗き込んだ。

「わっ！……って何だ？どうした？」

「だって……今日先生ずつとぼおっしてしてるよ？」

「……そうか？」

俺はあせあせしながら答えた。

「彼女とケンカでもしたの？」

また余計な事を……

「……あゆさん、日誌はちゃんと書いたか？」

「はい……先生、本当に彼女とケンカしちゃったの？」

周りにいた生徒達がざわざわと騒ぎ出した。

「ケンカなんかしてないよ。いいから早く日誌出しなさい」

「え！？先生やつぱし彼女いたんだ！」

やまとが興奮気味に叫んだ。こうなると、教室中がうるさくなる。

「先生の彼女美人？」

「先生の彼女いくつ？」

ガキ達が引つ切り無しに言うてくる……俺はそんなガキ達を宥めながら、本当にこの中に救世主なんているのか不安になっていた。

……いや、1人だけいる。

俺は窓際の席で、1人黙々と芥川龍之介全集を読んでいる峰りようまに目をやった。峰医院の跡取り息子。成績は常にトップ。今年、

中学受験を控えている6年3組唯一の優等生。

りょうまなら…地球を救う救世主になるかも…25年後に地球に死のウイルスが流行して、りょうまがそのウイルスの抗体を作って…って何考えてるんだよ！

そんな事を悶々と考えながら数日が過ぎた。まったく連絡が取れなくなつた真登香の事を考えながら、俺は放課後の校舎の見回りをした。

赤い夕日が差し込む廊下を歩いていると、6年3組の教室から物音が聞こえてきた。

みんな帰つたはずなのに…

俺は恐る恐る教室を覗いた。――おかっぱ頭の少女が机の中を漁っていた。

「…みお？…みおさん？」

少女の身体がビクツと動いた。

「…何やつているんだ？もうとつくに下校時間は過ぎたぞ…」

俺はそう言いながら、みおの手に握られた真新しい絵の具セットを見た。

「…みおさん…それ君の？」

みおは黙って唇を噛んだまま、うつむいた。俺は…今までに感じた事のないくらい悲しい気持ちになっていた。

「…みおさん！」

逃げ出そうとしたみおの細い腕を、俺は掴んだ。

「っ放して！…」

「…みおさん！」

「やだぁ！」

みおは今にも泣き出しそうな声を上げた。

「どうしてこんな事するんだ！？」

「いいじゃん！みんないっぱい持つてるんだから！1個ぐらいいいじゃん！」

「よくない！！」

自分でも驚くぐらい、大きな声でみおを怒鳴り付けた。みおは目を大きくして俺を見た。

「…よくないよ、みおさん。人の物を黙って持って帰るのは…泥棒のする事なんだよ。泥棒は犯罪だ」

みおの唇が震え出した。

「…いいじゃん…みんなたくさん…買ってもらってるんだから…あたしは一個も買ってもらえないんだから…」

俺は目から涙をばろばろ流しながら喋るみおを見つめた。

「…もし、みおさんの大事なお友達がみおさんの物を勝手に持って帰ったらどうする？悲しくないかい？」

俺の言葉にみおは黙って泣いていた。

「もし君が悲しいと思うなら、それと同じ事を友達にはいけない。いいね？」

みおはうつむいたまま、小さく頷いた。

「…先生…もうしないから…今日の事は誰にも言わないで…パパにも…ママにも…お願い…先生…」

涙を流しながら俺に頼み込むみおの姿は、本当に小さかった。

「分かったよ。約束だ。だからみおさんも約束守るんだぞ！」

「うん」

そう言うときみおは少しだけ笑った。

俺はみおを下駄箱の所まで送り、職員室に戻った。するとすぐに佐伯先生が声を掛けてきた。

「原田先生！聞きましたよ！先生のクラスの山浦みおさん！」

俺はギクつとした。まさかさっきの事がもうばれた！？

「この間の交通安全ポスターコンクールの6年生の部で最優秀賞ですってね！いやあ…あの子は色々と問題がありますが、絵の才能があ

るみたいですわね！」

「え？そんなんですか！？」

目を大きくして言う俺の顔を見て、佐伯先生が笑った。

「先生はこの学校に来たばかりだから知らないか？ みおさんは前にもコンクールで賞取った事あるんですよ。絵を描くのが好きな子でしょ？ちゅう描いてましたもんね。もつと親御さんもそういう才能を伸ばせるようにしてやればいいのにねえ」

…知らなかった。

いや、よく考えると確かにみおの色彩感覚は子供のくせにすごいなあゝて感心した事はあった。…そう考えると、俺のクラスには個性的だが才能のある子が多いような気がする。やまとは学校1俊足だし、れみは歌が上手い。たくみは性格に問題ありだが雑学博士だ。それから、それから…俺のクラスの生徒は結構イケてるのかもしれない。

本当に、あの女が言ってたようにあのクラスの中に救世主がいるのかもしれない。

俺は本気で…でも漠然とそう考えるようになっていった。

あんなに子供が疎ましかった自分が、あんなに子供と接するのが苦手だった自分が、今はどうだ。常にクラスの子供達を観察するようになっていた。今何を話しているのか？何を考えているのか？何を笑っているのか？何を怒っているのか？——そして、子供の行動が如何に単純で、子供の心が如何に繊細か、少しだけ分かったような気がした。

そうこうしているうちに学校は夏休みに入り、結局あの女が言っていた悪魔は現れなかったし、あの女からはあの日以来まったく連絡はこなかった。

そして…

「——もしも？正ちゃん？」

真登香の元気な声に俺は拍子抜けしてしまった。

「なっ何だよ！今まで何やってたんだよ！ずっと連絡してたんだぞ！」

「ごめん、ごめん！ちよつと入院してたの」

「入院！？まっ…まさかお前！…」

「何早とちりしてんのよ！残念ながららベイベィゝはまだ健在よ！」

真登香の言葉に、俺は言葉を詰まらせた。そんな俺を真登香は呆れたように笑った。

「少し夏バテしたのよ。身体の状態も普段と違うから用心のため入院したのよ…大したことないわ」

「そうか…ここんとこ無茶苦茶暑かったからな…無理すんなよ…」

「…ええ…ところで、今後についての話し合いはいつする？」

真登香はいつもに増してサバサバと聞いてきた。俺はなんだか無性に寂しい気持ちになった。…俺が一番悪いんだけど…

「今日は？俺がそっち（真登香の家）に行こうか？」

「…今日は無理かな…明日登校日でしょ？準備しないといけない事があるの…明日は学校の先生達と食事する約束しちゃってるから…明後日は？」

「うん…じゃあ、明後日の土曜日だな。昼飯でも食いに行くか？」

「うん！」

真登香は元気に答えた。そんな真登香の声を聞いて、俺は少しだけホッとした。

あの日、美術館で俺は真登香にとってもひどい事を言ってしまった。その時の真登香の一瞬だけ見せたあの強張った表情が今も脳裏に焼き付いている——

次の日の登校日は朝からシトシトと雨が降っていた。ジメジメとした空気の中、体育館では校長のやたらと長い話が続いた。子供達はうんざりした表情で頭から汗を流していた。もちろん、俺達教師もタオルで汗を拭いながら腕時計ばかり見ていた。

「——マジで！？デイズニーランド行ってきたのか！？」

「いいなあ！私も行きたい！」

「オレは去年行ったもんね」

教室では、子供達が夏休み前半の話題を夢中で喋っていた。

「…やまと君、随分焼けたな」海にでも行ったのか？」

「違うよ先生。サッカーの合宿で焼けたんだ」

夏休み前よりもさらに真黒に焼けた顔で、やまとは得意げに笑った。

「やまとは」リーガーになるんだよね？」

「うん！それでオリンピックにも出場するんだ！」

「オレはプロの野球選手！」

子供達は鼻の下に汗を溜めながら必死に自分達の将来像を語り出した。

「オレはな！…」

「はいはい！もう終了！早く帰らないとお母さんが心配するぞ！」

俺の言葉に子供達がランドセルを背負い、帰り仕度を始めた。

「私のお母さん今日も仕事なの。だから帰りにコンビニでお弁当買って帰るのよ！」

みおが笑顔で言った。

「あつ！みおちゃん、私も付いて来ていい？」

「ダメだよ！寄り道は！真っ直ぐ家に帰りなさい！」

俺の言葉にみおとさくらがうなだれた。

「……だつてお弁当買つて帰らないと食べるのないもん……」  
口を尖らせて言うみおを見ながら俺はため息を吐いた。

「……ああ……そしたらコンビニ行つたらすぐ帰るんだぞ！さくらさんも一回家に帰つてからみおさんと遊びなさい」

「はあ……い！」

「みおちゃんとさくらちゃん一緒に遊ぶの？私もいい？」

「先生！さようなら……！」

そんな事を言いながら、子供達はわらわらと教室から出て行つた。俺は子供達のせいで散らかった教室の中を簡単に掃除しながら、窓から外を眺めた。朝より雨足が強くなつた空を眺めながら、明日真登香とどこに昼飯を食べに行くか考えていた。

そして、俺は何気に校門に目をやった。赤やピンクや黄色の傘が歩く校庭から少し離れた校門の所に、明らかにおかしい……尋常ではない黒い物体があつた。

俺は一気に血の気が引いた。

しまった……！！

俺はそう考えるのと同時に教室から飛び出した。そして全力で子供達がいる校庭まで走つた。

「先生！どうしたんですか……！」

「ふっ不審者です！校門の所に不審者ですよ！早く警察呼んで下さい！」

俺はそう叫びながら階段を駆け下りた。

校庭に出ると、その黒い物体が何なのかすぐに分かつた。

その男は傘もささず、雨に濡れた顔を緩ませながら子供達に近づくようにしていた。子供の一人がその異常な雰囲気を見て悲鳴に近い声を上げた。その声を引き金に、校庭にいた子供達が一斉に叫び始めた。男は不気味な雄叫びのような声で叫びながら、固まって下校していた俺のクラスの子供達の所に突進していった。

「やめろ……！！！」

俺は叫びながら必死に走つた。子供達の色とりどりの傘が空中に

舞った。子供達の悲鳴がどしゃ降りになった雨の激音と混ざりあった。

「キヤアアア——」

男が子供達を捕まえようとした時、俺はその男に飛びかかった。

「うおおお！！」

「この野郎！！」

俺は必死に男を押さえ付けた。

「……っせっ先生！！……」

子供達が恐怖のあまりその場から動けなくなっていた。

「……っ早くっ……逃げなさい！早く校舎に逃げなさい！！」

「うおおお！放せえ！！」

男がすごい力で暴れ出した。

「何やってるんだ！！早く逃げろ！！」

「先生！怖いよ！！」

やまとが泣き叫んだ。

「……泣くな！やまと！みんなを連れて早く走れ！！やまと！！」

俺の言葉にやまとの顔が変わった。

「みんなっ！！立ってえっ！！……っ……早く！！」

やまとの声に子供達が立ち上がり、校舎まで駆け出した。

「放せえ！！」

暴れ続ける男をなんとか押さえ込みながら、俺は豪雨の中走って逃げる子供達の後ろ姿を見た。

そうだ！もつと早く！もつと遠くに逃げるんだ！！

その瞬間、俺の脇腹に激痛が走った。

「……いつ……」

俺の身体を男は足で蹴り払い、のっそりと身体を起こした。俺はナイフで刺された脇腹を抱えながら男を見た。男は俺に笑いかけ、そして子供達の方に目をやった。そしてゆっくりと立ち上がるうとした。

行かせてたまるか！！

俺は男の足を両手で掴んだ。

「！！放せよお！」

男が俺の手を蹴った。それでも俺は放さなかった。脇腹から血がとくとくと流れているのが分かった。意識が遠のくのを感じた。

「何だよお！お前！放せよ！」

男は俺の身体を蹴り続けた。それでも俺は放さなかった。

「……もんか……っ……」

「何だよお！！！」

「放すもんか！！！」

俺は力の限り叫び、最後の力を振り絞り、男に飛びかかった。

「ひい！！！」

男は勢いよく後ろにひっくり返った。そして地面に後頭部を強打ち、そのまま動かなくなった。

ウ———というパトカーのサイレンと

「……先生！原田先生！！！」

という他の先生達の声聞きながら、俺はそのまま意識を失おうとしていた。

子供達は大丈夫か？間に合ったのか？

俺は薄れゆく意識の中、そんな事を考えながら……そして真登香の事を考えていた。

『——う……産むのか？』

そう言った俺の言葉に、真登香は一瞬だけ顔を強張らせた。俺はしまったと思った。なんて事言ってるんだ！でも真登香はすぐにいつもの穏やかな表情になって……でもとても悲しそうな瞳で苦笑した。『それをどうするか、2人で決めないとね』

真登香はそう言って笑った。微かに瞳を揺らせながら……笑っていた。

……正ちゃん……

真登香の声が頭に響く。

……正ちゃん……

真登香……ごめん……俺……

「正ちゃん!!」

ハッとした俺の目にコンクリートの天井が飛び込んできた。

「正ちゃん!!!!」

真登香が泣きながら俺の顔を覗き込んだ。

「真登香?……」

「もう!!……正ちゃん!!」

真登香はそう言いながら、泣きながら俺の身体を揺らした。俺の脇腹に痛みが走った。

「っ痛!!……痛いつて……」

「あ!ごめん!大丈夫!?!」

真登香は慌てた様子で言った。

「っ!!子供達は!?!」

俺は慌てて真登香に聞いた。真登香は穏やかに微笑みながら頷いた。

「大丈夫よ、みんな無事よ。正ちゃんが身体張って守ったんですもの。さつきまでみんな親御さん達とここにいたのよ」

「え?ここに?……ここって病院?」

俺は自分が寝ているベッドから病室を見渡した。

「病院に決まってるじゃない!正ちゃんお腹刺されたのよ!たくさん血出たのよ!出血多量で大変だったんだから!」

真登香の言葉に俺はようやく恐怖が湧いてきた。

「子供達も親御さんも正ちゃんが目覚めるまで待つてるって言つてただけだね…他の先生や看護師さんが帰るようになってなんとか説得したのよ」

「…そうか…あつ！悪魔…犯人は！？」

「犯人ね…頭打って完全に気絶してたから警察の人が抱えて運んだわよ…まったく…最近こういう事件多いわよね。無差別に人を傷つけるの…本当に腹が立つわ…」

真登香は本当に悔しそうに唇を噛んだ。

「…真登香…お前は大丈夫なのか？体調は？…今日約束あるとか言つてなかったか？」

「約束！？こんな時に何言ってるのよ！私そんな薄情な女じゃないわよ！」

「いや…別にそんな意味じゃ…」

「…もう！…今から正ちゃんのアパート行って着替えとか取つてくるけど…他に何か持つてきてほしいのある？」

真登香は丸椅子から腰を上げながら訊いてきた。

「いや…あ…文庫本を何冊か…机の上に置いてるから…」

「うん、分かった」

そう言つて病室から出て行くとする真登香の手を、俺は掴んだ。

「！？なつ何よ？どうしたの？」

真登香が驚いた表情で俺の顔を見下ろした。

「…何か月ぐらい入院かなあ？」

「…そうね…まだ詳しい事は聞いてないけど…多分…1か月ぐらいじゃないかな？何で？」

「…そうか…」

俺は頷きながら…呼吸を整えた。

「…正ちゃん？」

「退院したら…お互いの両親に挨拶に行こう」

「え？」

「子供は2人でちゃんと育てよう」

俺の言葉に、真登香はしばらく黙っていた。

「…後悔しない？」

真登香の言葉に俺は少しショックを受けた。

「どういう意味だよ！」

「だって…正ちゃん、子供嫌いじゃないの？」

「本当に嫌いだったらこんな目に遭ってないよ！」

そう言くと、真登香は吹き出すように笑い出した。

「そうね、うん…あ…でももうすぐ正ちゃんの両親ここにいらっしやと思うよ。連絡しといたから」

「え？そうなの？そしたら今日お前の事紹介するよ」

「え！？今日！？」

「何？嫌なのか？」

「…いや…だって…」

真登香はモゴモゴと言いにくそうにしていた。

「何だよ？」

「…着替えてきた方がいいかなあ？」

「は？」

「…服…変じゃない？」

真登香の言葉に俺は少し面食った。

「変じゃないけど…」

「清潔感ある？ちゃんと似合ってる？」

真登香の普段の服装はいつも清楚でよく似合っていた。今日の白のワンピースに黄色のカーディガンを羽織ったコーディネイトなんて実に真登香らしい服装だった。まったく、女の考えはよく分からない。

「似合ってるよ。問題ないよ」

俺がそう言くと、真登香は嬉しそうにハニカんだ。

真登香が病室を出て行くと、すぐに俺の携帯が鳴った。

俺は恐る恐る携帯を覗き込み、非通知の着信である事を確認した。

「…もしもし？」

「『ご結婚、おめでとうございます』」

女の言葉に俺は慌てて病室を見渡した。

「あつあんた本当に人間か!？」

「人間でございます。お怪我の具合はいかがですか？」

「あ? ああ…まあなんとか生きてるよ…」

「それは良かった…今回は大変お疲れ様でございました。原田様の勇気ある行動に私、とても感動致しました。今後ともこのようにして救世主達を御救い下さいませ」

「はあ!? まだこんな事があるのか？」

「救世主達の周辺には危険がいっぱいでございます」

「いやあ…だからってその度にこんな目に遭ってたんじゃ身が持たないよ!」

「あなた、担任でしょう？」

「担任だからって…こんな安月給でいちいち命張ってらんないよ!」

「さようでございますか…ですがみなさんはそうやって救世主達を守っているのです」

「みなさん? 俺だけじゃないのか? ん?…」

救世主達?... 達?

「あんたさっき救世主達って言ったよな? 救世主って1人じゃないのか？」

「私、1人なんて一言も言っではおりません」

この女...

俺はなんだか急に力が抜け、笑いたい気持ちになった。

「原田様、今回あなたは英雄として認められました。その証を後日お送りいたしますのでどうぞお受け取り下さいませ」

「え? 本当に？」

「はい。では、今後とも救世主達をよろしくお願い致します」

女はそう言っで通話を切った。

俺はしばらく茫然と手に握った携帯を見つめた。そして静かに、ゆっくりと笑いが込み上げてきた。俺は痛む脇腹を押えながら必死に笑った。

翌日、子供とその親達が見舞いにやってきた。親達は何度も何度も泣きながら俺に頭を下げた。

「もういいですから…頭を上げて下さい！」

「本当に何度も感謝してもしきれません！本当にありがとうございます！  
ました！先生！！」

ほとんどの親達は泣きながら笑っていた。そんな親の様子に子供達も泣いていた。

「…先生…これみんなで描いたんだ」

やまとが恥ずかしそうにかなり大きめの紙袋を差し出した。俺はその紙袋の中に入っていたかなり大きめの色紙を見て、目頭が熱くなった。

その大きめの色紙にはクラス全員の似顔絵とメッセージがびっしりと描かれていた。そして中央に大きく

<先生はぼく達、わたし達のヒーローだ！！>  
と、書かれていた。

< 5 >  
ヒ  
ー  
ロ  
ー  
の  
証

E  
N  
D

## <5>ヒーローの証（後書き）

またまた拙いお話にお付き合い頂き、本当にありがとうございました（＾－＾）マジユモトコ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7810e/>

---

僕達の地球（ほし）

2010年10月8日15時30分発行